

書 誌 調 整 の 歴 史

History of Bibliographical Control

前 嶋 正 子

*Masako Maejima*

*Résumé*

It is a fundamental desire of a man to access and acquire as comprehensive as possible sources and materials he needs for his research and other purposes. In addition to, however, a rapid increase of recorded materials (including not only primary sources, but also secondary sources), there has been a change in the type of requests on the part of those who need these information. That is to say, instead of keeping with traditional boundaries of learning, there has been an increased need for inter-disciplinary approaches. To respond to these circumstances, effective "bibliographical control" is stressed and desired.

The understanding of the concept of bibliographical control by librarians and documentalists is wide apart with various nuances, and even vague in some cases. In this paper, the writer has attempted to clarify the meaning of bibliographical control, to trace its history at the international level, and finally describes recent trends briefly.

As the ultimate aim of bibliographical control is to "enable any researcher anywhere in the world readily to discover, locate and obtain the content of whatever segment of man's record he may want, for whatever purpose in whatever form", the history of bibliographical control is not merely that of bibliography. From this point of view, some representative attempts made from the latter half of the nineteenth century to the World War II are taken up. They are *Catalogue of scientific papers*, *Concilium bibliographicum*, *International catalogue of scientific literature*, International Institute of Bibliography, International Committee on Intellectual Cooperation, International Federation for Documentation, and International Federation of Library Associations.

The conclusion arrived at from the study of these attempts is that, though bibliographical control at the international level would not be impossible, that at the national level should be taken up first. After the World War II, the UNESCO has endeavored to facilitate national bibliographical services. But the role which the UNESCO can play is only a portion in the field of

---

前嶋正子： 国際基督教大学図書館目録係。

Masako Maejima, Assistant Cataloger, International Christian University Library.

bibliographical control.

At present, mechanization is a prevailing tendency in any subject and field, and it is no exception in the bibliographical world. In the academic world, specialization is very much in evidence. On the other hand, mission-orientation is in demand. In a situation such as these, in order to advance bibliographical control effectively, one must pursue constantly an user-oriented resolution based on a broad perspective.

## 序

### I. 書誌調整の意味

### II. 書誌調整の歴史

### III. 戦後の書誌調整活動

## 結語

## 序

人は多くの場合、過去の人間が残した文化の遺産、知識のストックをもとに、新しい研究を生み出して蓄積を重ね、次の時代の発展への足がかりを築いてゆく。この知識のストックの主流を占めるのが文献を中心とする記録資料である。次々に発生する情報も、それが記録されなければ後世に残らない。また、たとえ記録されても、それらが有機的に整理され、秩序だてられなければ、それぞれの資料は十分に効果を発揮しえないで埋もれてしまうかもしれないし、必要に応じた文献の利用も望めないだろう。

こうした要求に対処するため、過去、現在にわたってさまざまな方策が講じられてきた。書誌を中心とする各種の2次資料はその中の一つで、現在においても有力な手段である。この、1次資料から2次資料への経過は、単なる必要性を越えて、人間の知的欲求の高まりに従って生ずる当然のなりゆきであったとも言えるだろう。しかしながら、今日、1次資料の驚異的な増加とともに、その混乱を調整するために編さんされる2次資料そのものもおびただしい数に上っている。そして、“……それら〔2次資料〕相互の連携が不十分なために、実際には無駄な重複があったり、収録もれがあったりして、全体的な調整からは程遠い状態である。”<sup>1)</sup>

このような、2次資料を含めた文献自体の多様化、量的増加などに伴う混乱に加えて、研究その他の目的で文献を利用する側における要求の変化にも注目しなければ

ならないだろう。もともと、これらは本来切り離して考えられるべき性質のものではなく、相互に密接な連携を保ち、影響を及ぼし合って発展してきたのではあるが——。すなわち、特に科学技術分野において顕著のように、mission-orientationなど、新しい研究体制の誕生に伴い、従来の固定的な学問の間の仕切りを取り払って総合的な見地から問題を解決してゆこうとする、inter-disciplinaryなアプローチの手法がますます必要とされつつある。一方、各主題分野の細分化、専門化が進み、より詳細な情報が求められることになる。こうした諸般の事態に即応するために、効果的な“書誌調整”の必要性はますます大きくなっていると云われる。

本稿では、この“書誌調整”という問題について、今日、甚だ広範囲に用いられているこの言葉の意味を明らかにしたあと、国際的な規模での書誌調整を中心に、その活動の歴史と、併せて今日の動向を概観しようとするものである。

## I. 書誌調整の意味

### A. 書誌調整——概念の背景

“書誌調整”ということばは、今日、図書館、ドキュメンテーション関係者の中で頻りに口にされるが、曖昧とは言えないまでも、かなり広範な意味を籠めて——ある意味では気軽に——用いられている。ことば通りに受け取れば、一見、単純明解なようでありながら、実は極めて幅広い内容を包んでいるらしいことに気づく。

一口に書誌調整といった場合、①調整の対象は何なのか……a) 書誌によって1次資料の混乱を調整することか、それとも2次資料間の調整を意味するのか。b) すべてのタイプの記録資料に及ぶのか、あるいは文献と呼ばれる手写・刊行資料に限られるのか。②技術的な問題も含まれているように思われるが、それがどの程度の比重をもって考えられているのか……などなど、いろいろ疑問が浮かんでくる。解釈の幅も程度も、このことばを使う人の立場によって多種多様なのである。

日本語では、“書誌的調整”あるいは“書誌的コントロール”などのことばも見かけるが、一般に“書誌調整”が定着しているようである。これに対応する英語には“bibliographic control”, “bibliographical control”および“bibliographic organization”がある。ただし、英語でも、主として使われるのはアメリカにおいてである。しかも、多くの場合、“bibliographical control”という表現が用いられ、“…organization”は少ない。“…control”と“…organization”は、ほぼ同義に用いられる場合もあるし、多少の共通点はあるが本来は別個の概念であるとする立場もある。“…control”の手段として“…organization”があるとも考えられるが、両者の差異については改めて触れることにする。本稿では、いずれも“書誌調整”と訳す。

ところで、書誌調整に対する解釈の多様性は、日本語にのみ見られる現象ではない。P. Wilsonも指摘しているように、<sup>2)</sup> 英語においても、“bibliographical control”ということばに対する理解はさまざまで、多くのニュアンスを含んでいるのである。しかし、書誌調整の究極の目的が、“……あらゆる研究者が、たとどこにいて、どんな記録の断片をどんな目的で、又どんな形式によって必要とする場合でも、直ちにその所在を知り、実際にその記録を見つけ出し、かつ入手できる事……”<sup>3)</sup>にあるとするならば、書誌調整とは、文献面における人間の根源的な欲求を満たす最終目標であり、そのことばの概念の曖昧さを、使う人の責任にのみ帰することのできない極めて大きな問題であるということになろう。

ちなみに、*Library literature* に“bibliographical control”の件名が現われたのは1943-45年版からであるが、その‘See also’（「をも見よ参照」）の項を見ると、当初は abstracting; bibliography, international; bibliography, national; cataloging; classification; indexes and abstracts が挙げられており、1958-60年以降になると、information retrieval も加えられてい

る。この一例からもわかる通り、単に書誌のみならず、抄録、索引、分類法、さらには I.R. の方面にまで関連を持つことばなのである。このことからも、書誌調整の概念、領域の広さの一端が窺い知れよう。換言すれば、書誌調整 (bibliographical control) が、このような範囲で考えられ、用語として使われていることを示している、ということでもある。

## B. 定義

“書誌調整”の概念の背景は甚だ広いのだが、これを具体的に表現するとどのようになるか、ここで幾つかの定義（あるいは解釈）を挙げてみる。

ユネスコは、1950年の国際書誌サービス改良会議に先立って、1949年に米国議会図書館と共同で計画グループを結成し、草案作成のための書誌調査 (Bibliographical Survey) を行なったが、第2回中間報告書の中で、書誌調整 (bibliographical control) を次のように定義した。

研究者が求めるものならば、人間の思想、行動、経験及び知識、或いはその内容に関する如何に断片的な記録であろうとも、またどの様な目的のためであろうとも、又記録の表現形式に関係なく、如何なる研究者にも、いつでもそれが発見でき、その所在を知り、且つ入手できるようにする型の考案(divices) 用具、及び事業のこと。<sup>4)</sup>

そして、さらに“或る所定の人間記録、或いはその内容を知らせる特定の諸計画、諸用具、或いは諸事業”を“書誌諸調整” (bibliographical controls) と呼ぶ、としている。<sup>5)</sup>

同じ、ユネスコ/米国議会図書館の書誌調査班が、会議の草案として提出した最終的な報告書の中では、

「書誌調整」(bibliographic control) とは、書誌を用い、また書誌を目的として、手写及び刊行された記録物を自由に駆使することを意味する。<sup>6)</sup>

と、先の中間報告よりも限定的な定義づけを行ない、「書誌調整」とは、「書誌 (bibliographies) によって効果的に資料に接すること」と同義である。したがって「医学における書誌調整への参考 (reference) とは、「書誌によって効果的に医学関係資料に接すること」を意味する。<sup>7)</sup> という説明を加えている。

このように、定義の中にはっきり“書誌”ということ

## 書誌調整の歴史

ばを挿入して意味をより限定したことで、中間報告よりも内容が具体的になったとも言えるのだが、これが、書誌サービス改良会議のために準備された定義であったことを心にとどめておくべきだろう。

一方、Verner W. Clapp は、書誌調整の問題を“bibliographic organization”としてとらえ、“……人間のコミュニケーションの記録物を体系的にリストすることによって生じた効果的な配列様式……”<sup>8)</sup>と定義し、“そのようなリストはそれ自体、書誌 (bibliographies) と呼ばれ、書誌を作る技術が bibliography である。”<sup>9)</sup>と述べている。

彼の論文は、シカゴ大学図書館学校の第15回年次総会(1950. 7)のために提出されたものの一つである。この会議では、増加しつつある主題専門書誌 (subject bibliographies) が、カバレッジにおいても収録方法においても利用者の要求に適合していないこと、また、たとえ書誌そのものを合理化して十分なリストを作成しても、研究者が現物にあたることから始めることができなければ、決して問題の解決にはならない、という見解に基づいて、テーマとして“主題書誌”あるいは“ドキュメンテーション”ではなく、“書誌調整” (bibliographic organization) ということばが選ばれたのであった。

この定義の中で Clapp は、調整 (organization) の対象を“人間のコミュニケーションの記録物”と表現し、手写・刊行されたもの、という狭い意味での視覚的記録資料にとどまらず、非刊行形式のものにまで広げるべきことを示唆している。そして、‘体系的’あるいは‘効果的’という端的な表現で、その意図を的確に表わしている。彼はまた、先に述べた、ユネスコ/米国議会図書館書誌調査班のメンバーでもあった<sup>10)</sup>したがって、この定義の趣旨はこれまで掲げたものと大差ないと見てよいだろう。

Robert B. Downs は、“完全な書誌調整 (perfect bibliographical control) とは、すべての図書および、図書館に関係あるすべての資料の存在と所在を完全に記録したものを意味する”<sup>10)</sup>と述べ、さらに、その内容は論理的に分けると、

1. あらゆるタイプの刊行資料およびその他の図書館資料を完全に記録すること。
2. これらの資料を図書館その他の保存機関で組織的に入手すること。
3. ユニオン・カタログ、ユニオン・リストおよび

び同種の手段 (devices) によって資料の所在を示すこと。

### 4. 全分野の主題書誌を作ること。<sup>11)</sup>

の4段階になる、としている。彼は、書誌調整の問題点を指摘する際、説明しやすいようにこの区別を設定したものと考えられるが、彼の定義は、図書館とのつながりを強く意識しすぎているようである。しかし、書誌調整を行なう際のサービスに関する側面を具体的にとらえる、ひとつの手がかりとはならぬ。

以上挙げた定義や解釈は、いずれも1950年代前半の、比較的古いものばかりである。最近の文献には、暗黙の了解ができ上がってしまったかのように、これとってはっきりと言葉で説明したものがなく、図書館学・ドキュメンテーション関係の用語辞典においても定義らしきものは見当らず、簡単に、‘情報の収集、分類、伝達、利用のプロセス’ という意味での“documentation”とほぼ同義として扱われているに過ぎない。<sup>12)</sup>

現実には用いられている“書誌調整”ということばは、上の6)、8)のような、“書誌”に焦点をあてた解釈にとどまらず、4)に示されているように、“あらゆる研究者(あるいは文献探索者)が、どこにいて、どんな記録の断片を、どんな目的で、又どんな形式で必要とする場合でも、直ちに発見し、その所在を知り、かつ入手あるいは利用できるようにするための工夫、道具、事業”のすべてを含めて考えられているところに、解釈の幅が出てくる原因があるわけである。書誌学者(書誌に特別関心を寄せる人々)は、当然のことながら、“書誌”(ここでは、広い意味での2次資料と考えてよい。したがって、索引、抄録なども含まれる。)を編さん、利用することによって、1次資料または2次資料相互の混乱を調整し、求める資料を効果的に、かつ組織的に発見、入手、利用できる状態にすることを書誌調整と行うだろう。また、別の立場の人々——たとえば、I.R.とかドキュメンテーションの方面に関心を持つ人々——は、調整に関する技術的な側面により大きなウェイトを置いて、文献のコントロールということを考える。この点で、彼らの念頭にある“書誌調整”は、“ドキュメンテーション”と呼ばれるものと非常に密接な関連を持つ概念なのである。今、ここで、ドキュメンテーションの定義をうんぬんする場合ではないし、ドキュメンテーションそのものの意味も、時代によって多少異なってきたはいるが、現在、一般に受け入れられていると思われるもので、比

較的わかりやすい解釈を下に示す。

ドキュメンテーションとは、人間による情報の生産、生産された情報の定着化または形式化、定着・形式化されたものの収集、処理、配布、要求に対応する利用を可能ならしめる手段・方法、利用に基づく情報の再生産の過程などのすべてにかかわる技術の総体である。<sup>13)</sup>

すなわち、情報（この定義では、広く情報として、文献・記録資料とは限っていない）の有効な利用を促進するための補助的用具、技術を強調して考えた場合に、ドキュメンテーションと書誌調整とのつながりが生じてくるのである。

さらに、書誌調整と I.R. (Information retrieval) との関係を考えてみよう。‘retrieval’ を、「見失ったものや、存在することが判明しているか、若くは容易に予想できるものを、取りもどしたり、発見すること。」と解するならば、I.R. は“書誌調整”において我々が追究する目的と極めて相通するものである。しかし、I.R. における‘information’は、“書誌調整”が対象とする記録資料（たとえそれを刊行資料に限らないとしても）のみならず人間のコミュニケーションに何らかの役割を持つ、ある意味での‘情報’と考えられるものすべてに及ぶという点で、I.R. は書誌調整よりもなお広い領域をカバーしている、と言えるだろう。また、このことばが、機械（特にコンピューター）の出現に伴って盛んにもはやされてきたことにも表われているように、これも、検索の技術の方に、より重点が置かれている、と見ることができよう。なお、retrieval ということばを考えるならば、“書誌調整”は I.R. よりも（——というよりその中の）“document retrieval”の方に近いと言えるかも知れない。

こうして見てくると、“書誌調整”には広義と狭義とがある、と考えることもできる。広義では、記録情報源を、それを必要とする人々が容易に発見、入手、利用できるように効果的に組織するための道具、方策、活動（事業）のすべてを包括したことばであり、もちろんその中に技術（たとえば分類法、抄録法、索引法など）も含む。狭義には、調整の具体的な道具（ツール）として、書誌（を中心とする2次資料）を作成し、それを用いることによって、記録物の中から必要とする情報を的確に引き出し、駆使できるようにすることを言う。2次

資料相互のカバレッジの重複などを調整することも含める。

もっとも、両者の間は判然と区別できるというのではなく、多分に観念的な分け方でもある。しかし、一応上の区別に従うと、具体性から言えば狭義の方が優っているし、理解もしやすい。“bibliographical control”という英語を単純に解釈すれば、‘bibliographical’に主眼が置かれて、まず‘書誌’が頭に浮かぶのは自然である。また、文献の混乱をコントロールするための手段として作られてきたのが書誌なのだから、元来狭義の方を意味し、その問題に付随する要素として、abstracting, classification, indexing などの技術が考慮に入れられる、という程度であったと思われる。それが、情報処理技術のクローズ・アップという傾向に伴って、書誌そのものから調整の諸技術の方にもかなり目が向けられるようになり、“書誌調整”ということばが、これら技術的側面をも大きく取り上げる、広い意味になっていったのではないかと考えられる。

しかし、“書誌調整”という場合には、調整の手段、用具、およびそのための諸活動が主なのであって、調整をより効果的に促進するために、分類、抄録、索引法などの技術は不可欠の要素ではあるが、あくまでも付随的な性格のものである。

もちろん、I.R. の中で用いられた概念や手法は、必然的に、書誌調整にとっても有益であり、大いに役立てられるべきである。また、“書誌調整 (bibliographical control) の完全な計画は、それぞれが全体計画の中で演ずる特別な役割を持った、広範なカテゴリーから成るべきである。”<sup>14)</sup> という意見を俟つまでもなく、この大きな問題は、関連諸分野の援助と、それらの円滑な調整によって解決することができるのである。したがって、書誌調整を、“書誌によって……”と限定しすぎることには疑問を持つが、一方、技術的な側面を余りに強く押し出すのも、本来の範囲を逸脱してくるように思われる。

### C. “bibliographical control” と “bibliographic organization”

日本語の“書誌調整”に該当する英語は、主として“bibliographical (又は bibliographic) control”であるが、時々、“bibliographic organization”も使われる。本稿ではこれまで、両者の間に特に区別はつけず、一括して“書誌調整”と述べてきた。しかし、これら2種類のことばには、微妙な差違があることに気づくはずである。

## 書誌調整の歴史

本来、‘control’ と ‘organization’ ということばだけを取り上げて比較するならば、両者は明らかに違う意味を持っている。“bibliographical control” と “bibliographic organization” も、理論的には別の概念であるが、ともに、文献の混乱状態に対処し、その混乱を整理し、必要とする資料を確実に発見、入手、利用できるようにするために何らかの手段を講ずることを目的としている、という点で、発想の基盤は共通である。ただ、観点の違いが表現に差違をもたらしたものと考えられる。Clapp はこの観点の相違について、“過去において、‘bibliographic organization’ の概念は、‘bibliographic control’ と呼ばれていたものと、内容の点で——幾分観点においてであるが——それほどかけ離れてはいないと指摘されていた。前のことば [bibliographic organization] は状態 (condition) を表現しており、一方、あとの方 [bibliographic control] はむしろ書誌作業 (bibliographic work) の効果の方に関係がある。”<sup>145)</sup> と述べている。(・印筆者) 彼によれば、“人間のコミュニケーションの記録を体系的にリストした結果生じた効果的な配列様式” が “bibliographic organization” であり、“リスト自体 (書誌) を用い、あるいは書誌を目的として、手写・刊行された記録物を駆使すること (mastery)” が “bibliographic control” なのである。<sup>146)</sup>

P. Wilson も、表現は違うが、ほぼ同じような見方をとっている。すなわち、“‘organization’ は構造的な、構造上の概念であり、一方、‘control’ は機能的な概念である。”<sup>147)</sup>

ものごとを control する機能を果たすための有力な方法の一つに、あるものを organize (組織、構成) したものの利用が挙げられる。つまり、実際には、organization の問題に触れずに control について話すことはできないのである。ただ、organization は、control のための一手段であって、より実践的なニュアンスが強く、control の方がむしろ観念的である、とも言える。すなわち、control の理念、機能を具現したものが organization なのである。

一方、観点の違いとも関連して、両者のカバーする範囲の違いも考えられよう。bibliographical control を広義と狭義に分けることが可能ならば、広義には、書誌調整の目的を果たすための、あらゆる手段、用具、活動を指し、技術的な匂いが濃い感じであり、狭義の方は、‘bibliographical’ の方に重きを置いた意味と考えられる。そして、“bibliographic organization” は、むしろ

狭義の方に近いのではないか。日本語の“書誌調整”は、control も organization もすべて包括したことばとして用いられているのである。

### D. 書誌調整と書誌

Wilson は、書誌調整を bibliographical control として見た場合、bibliography と bibliographical control との間には、必然的な関係は全くない。もちろん、bibliography ということばの2つの主な意味のいずれかにおいて、両者の間には、現実には多くの関係があるのだが……と言っている。<sup>148)</sup> しかし、彼はこの場合、bibliography を ①文献リスト作成の仕事、①本や印刷の歴史を研究するという意味での書誌学、の意味に解しているのである。

だが、我々がここで取り扱おうとする “bibliography” (書誌) とは、図書その他の記録資料をリストしたものを指しているので、広く2次資料と解して差し支えない。このような前提に立てば、書誌は書誌調整を進める際の大切な道具であり、書誌調整の第一歩であることは明らかであろう。しかし、具体的な方策として、書誌というものを考えずに書誌調整は遂行し得ないのだけども、書誌調整においては——というよりも、元来——書誌は手段であって、それ自体が目的ではないのである。この立場はあくまでも堅持してゆくべきである。

## II. 書誌調整の歴史

研究その他の目的のために、必要な文献を可能な限り網羅的に集めたいと願うのは、人間の本質的な欲求に根ざすものと言えよう。そう考えると、過去の先人たちの業績の記録をリストしたものは——書誌とは呼ばれなくとも——相当昔から作られ、利用されていたことは十分推測できる。だが、求める資料、記録類はすべて手に入れることのできた時代があったとは無批判に信じられないまでも、生産される文献の絶対量が今日よりも遙かに少ない時代には、書誌自体およびそれを用いて求める情報に組織的に接近する必要性は極めて薄かったろうということは想像に難くない。

しかし、印刷術の発明など、諸技術の急速な進歩、科学の発展その他種々の事情に伴う文献量の増加によって、文献リストとしての書誌は、研究のための有力な補助ツールとして欠かせないものとなってくる。

15世紀末期に始まり、J. Tritheim, C. Gesner らの時代を経て、17~18世紀ごろまでに、西ヨーロッパ諸国

においては、個人の努力で数多くの世界的な規模の書誌あるいは全国書誌の性格を備えた販売目録などが作られてきた。しかし、これらの個々の試みを概観するのは書誌の歴史であって、書誌調整のそれとは趣を異にするものであろう。世界的規模の書誌調整を考えた場合、もちろん、全世界の文献を完全に記録したいというのは、図書館員や書誌学者たちの当初からの夢であり、現に、当時において世界書誌と呼びうるようなものが幾つか存在していた。そして、書誌調整の究極の目的も、上のような理想を実現するところから達成されると考えられていたわけで、その点においては、書誌の歴史が書誌調整の歴史につながるとも言えるであろう。が、書誌調整の試みとは、それを求めている人がその形態のいかんを問わず、また、目的、国境にかかわらず利用できるように、人間の記録を組織しようとする意識的な探求なのである。書誌調整の歴史は、結果（産物）としての書誌そのものよりも、書誌的事業、書誌的な試みを跡付けることによって明らかになるだろう。

この章では、19世紀後半から第2次世界大戦終結までの間を、書誌活動を取り巻く諸情勢および活動状況などの点から3期間に区切って、主に欧米諸国における歴史を概観し、書誌調整の概念の変遷の一部を探り出してみたい。

第1期は、1850年から1890年代前半にかけて。19世紀後半、特に最後の四半世紀には、書誌活動のみならず、図書館サービス全般にわたって急速な発展が見られた。書誌に関しては、その活動の調整や改善をはかるための機構の推進、法律の制定……といった外的環境の整備も徐々に進化していた。また、この時代は、目録作業、分類作業、その他図書館技術に関する方法と標準が示されるようになったほか、各種の図書館協会が結成され、図書館協力に対する新しい考え方が生まれた。いわば、開拓と、それに続く進展の時代とでも言うことができる。

これらの新気運は、決して書誌調整達成の意図にのみ依るのではなく、むしろ、輪転機の普及によって刺激された図書生産量の増大と、それに伴う知識の拡大、その他諸々の事情に帰しようところが大きい。しかしながら、こういった気運が、書誌調整に直接的、間接的な影響を及ぼし、何らかの力となり得たことは確かであろう。大規模な書誌調整問題に対しては、まだ十分に関心が高まっていなかったが、既に、かなり盛んに書誌活動を行っていた主題分野の専門家の間から、より充実した書誌調整に対する要望が起りつつあったのが、この

時代である。

次に、1890年代も後半に入ると、“与えられた主題分野で世界的に完全なものを目指す”書誌的な試みが相次いで始まった。本稿では代表的な3つの事業を採り上げ、これらの活動が一応の成果を上げながらも、それぞれ、成功に必要な条件を充足し得なかったことから衰退の方向へと進み、あるいは方針の変更を迫られるようになっていった1920年代までを第2期とする。ここで“1920年代”と、かなり幅広い期間を区切りとしたのは、この中で述べている諸事業が、性格を変えたとは言うもののまだ継続していたこと、その転換期が、何年と指摘できるほど明確ではなく、また各々異なっていること、などの理由による。したがって、次の第3期と多分に重複する期間もあると考えてよい。

壮大な目標を掲げて出発したこれらの試みは、それ自身の内包していた欠陥に加え、様々の外的な障碍にぶつかって、次第に行き詰まってくる。専門分野の細分化による主題相互の隔絶化が進み、主題専門家たちの多くは自分の分野にだけ関する僅かばかりの資料で満足し、重複も多かった。また、図書館界にあっては、管理形態の変化により、建築、渉外関係の方に力が注がれ、書誌問題の解決は後回しにされ勝ちであった。こうした書誌事業の世界を取り巻く諸相を一層明確にし、ある意味での転期となったのが第1次世界大戦である。

戦後の特色のひとつは、書誌調整における国際協力ということが強調され、そのための機関や会議が結成されるようになったことである。国際連盟の設立と、知的活動面における援助活動は、のちのユネスコの先駆的存在として知られている。また、国際図書館協会連盟の誕生により、書誌問題をも含めた各種の課題を国際的な立場で考え、情報を提供し合う場が作られた。その後のこれらの動きは、書誌調整にとって必ずしも好ましい方向にばかり進んだわけではないが、このような気運の盛り上がりは新しい動きと見てよいであろう。ここでは、戦後、次の大戦終結まで（正確にはユネスコ結成まで）の間を第3期とした。

#### A. 19世紀（1850～1890年代前半）

##### 1. Jewett の提案

1850年、新設間もない Smithonian Institution の Jewett は、“各タイトル別のステロ版作成、および、合衆国内公共図書館の総合ステロ版形成”の計画を、米科学振興会 (American Association for the Advancement of Science) に提出した。彼の構想の骨子は

## 書誌調整の歴史

- ①書誌記入の目録を迅速かつ安価に作製する新技法—ステロ版の応用
- ②完全目録の各部分を提供し、完全目録作製事業に最も寄与しうる団体—公共図書館の協力
- ③合衆国内で出版される人間の記録の大部分が登録され得るようにするための、最も合理的な方法—版權登録の改善

というものであり、彼は、この計画が universal catalog への基礎を成すものと考えていた。すべての国がこの計画を採用し、実施したならば、それによって形成された総合目録を集約した全世界書誌の出版も夢ではないと考えたのである。

彼の提案は、1853年のニューヨークにおける図書館員大会で受け入れられ、この計画は相当程度まで成功した。ステロ版を目録に利用すること、総合目録のための図書館協力の活発化などはこの結果生じた現象であったが、この好調も長続きはせず、数年後、操作上に不備ありとしてステロ版は廃止され、協同作業も所期の目的を達しようとする強力な機構を作り上げるほど強力なものではなかった。また、版權納本によって資料は Smithsonian Library へと集まったのだが、資金と熱意両面の不足から、同図書館ではその目録をとり得なかった。

こうした動きのあった一方、世界的な書誌調整の試みは、より狭い主題分野（特に科学の領域）で起こっていた。

### 2. “Catalogue of Scientific Papers”

1851年、Smithsonian Institution の Joseph Henry は、特に科学分野に関して図書館利用の促進をはかる最も重要な手段は、単行本に限らず、紀要、雑誌論文、会議録や研究の一部分をも探し出せるような件名索引を作成することであると、その年報で提案した。しかし金銭の目処が立たないため、英国科学振興会 (British Association for the Advancement of Science) 宛に書簡を送り、自分が米国の文献を担当し、その他の国々は英国で受け持って索引を作成するよう依頼した。同振興会は、1855年に Royal Society の Cayley, Grant, Stokes の3名を任命し、調査に当らせた。1858年には、1800年から1860年までの、すべての言語で書かれた科学雑誌の論文（紀要を含む）をリストした “Manuscript catalogue of the titles of scientific memoirs contained in the scientific periodicals in all languages” を作成することが決まり、J. Henry の発案が、イギリスにおいて実現することになったのである。これは、①逐次

刊行物索引、②著者索引、③分類索引、などから成る予定であった。

目録のための原稿は Society の図書館に集められ、外国の学会からの補充なども併せて、1864年には、前年の分までで約18万件以上に達していた。こうして、1867年、*Catalogue of scientific papers* が、1800年から1863年分までを6巻に収めて出版された。当初は、著者索引および件名索引から成るはずであったが、件名索引はその重要性和意義を十分に認められながらも、費用がかかりすぎることから見送られ、その後長い間実現しなかった。

第1回目の10年累積版 (1864-1873) を出すことに決めた時、この *Catalogue* を Royal Society の永続的な事業にすることを表決したが、その際に出た不満は、コストの増大ということであった。好ましからざる財政状態の下で、次の10年間 (1874-1883) の出版が承認されたものの、英国政府の全面的援助は受けられず、財源を各方面の投資に仰ぐようになり、*Catalogue* は、財政面でも国際的な性格を持ち始めた。

1890年代に入ると、個人の寄付によって再び主題索引出版の望みが持たれるようになった。結局、1908年から1914年にかけて、数学、物理学、機械工学の件名索引が出版された。当初の計画では、当時始まっていた *International catalogue of scientific literature* に倣って17分野に分ける予定であったが、初めの3巻 (A-Mathematics, B-Mechanics, C-Physics) にとどまった。

さらに、1914年には著者名索引の1884-1900年分が刊行されたのを最後に、この計画は打ち切られることになった。

19世紀の後半には、図書の生産量が倍加したと言われるが、それにも増して雑誌類のふえ方は驚異的なものであった。(1866年から1898年までの32年間に4倍近くになったという) *Catalogue of scientific papers* 行き詰まりの一因も、まさにここにあったわけである。こうした事態に直面したとき、従来、図書館員、書誌作成者、あるいは主題専門家の間で個別に行なわれていた書誌作製の仕事は、もっと広い視野から共同でなされるという方向に向かうべきであった。しかしながら、この時期 (19世紀後半) において、大部分の図書館員の目は、目録、分類などの技術、用具、施設、あるいは専門的職業知識の細部問題の方に向けられ、書誌調整という大筋からは逸れていた。この時期にも引き続いて主題書誌サ



ービスが隆盛であったのは、その分野の文献利用者からの要求の高まりもさることながら、上のような事情も一役買っていたことと思われる。

19世紀は研究者の要求、雑誌数、研究団体・機関の増加などによって、専門分野のカレントな書誌サービスが始められるようになっていた。1830年にはドイツで *Pharmaceutisches Zentralblatt*, 後の *Chemisches Zentralblatt* が発刊されたが、これは最初の抄録誌と呼ばれている。1864年には *Zoological record* が出、先にあげた *Catalogue of scientific papers* が初めて現われたのは1867年のことである。1880年に John Shaw Billings が出版を始めた *Index-catalogue of the Library of the U.S. Surgeon General's Office* は、蔵書目録であると同時に、医学関係の雑誌・紀要類に収録されている論文の索引としての性格も持っていた。

これら、化学や医学のほかにも、地理学、数学、物理学、社会学、などなど、各種専門分野における書誌活動は、大体、最初は個人の努力で機関誌などの一部を利用して始められ、のち、活動の主体を団体や機関に移すという道を辿って、次第に盛んになっていった。文献の出版量の増加と並行して、19世紀後半は、これら主題書誌の数が、前半のそれに比べて目覚ましい伸びを示している。(たとえば Malclès は *Bibliography* の中で、19世紀に創刊された主題書誌のリストを掲げているが、それによると、1820年代から1840年代終りまでの約30年間のものが12であるのに対して、1850年代に5、60年代に7、70年代に入ると20、80年代が12、90年代は17となっている。<sup>19)</sup> この数字は、ほとんど西欧諸国のものに限定されているが、当時の学問の中心はまだ西欧であり、これが大体の傾向を示していると判断して差し支えないだろう。)

このように、1890年代の前半までは、専門分野の書誌問題に専ら目が向けられ、書誌調整に、もっと広範な視野から取り組もうとする動きは見られなかった。当時、他の国々から援助を受けて、自然科学文献の国際的な目録を続けようとした *Catalogue of scientific papers* の計画も危機に瀕していたのであるが、ここでは、各主題に関心を持つ国々が協力しさえすれば、満足のゆくサービスが出来るものと考えられていたのである。

#### B. 1890年代後半～1920年代

1890年代後半に入ると、書誌調整の歴史上特筆すべき出来事が相次いで起こった。1つは“*Concilium bibliographicum*,”次に“*International catalogue of scien-*

*tific literature*”の計画、3つめは *International Institute of Bibliography* の設立である。

#### 1. “*Concilium Bibliographicum*”

*Concilium bibliographicum* は、動物学関係文献の国際的収録を意図して始められたものである。Herbert H. Field は1892年から1895年にかけて構想を練り、チューリッヒに本部を、ボヘミア、フランス、ハンガリー、ロシアに支部を持つ動物学の文献センターを設けて、動物学文献の国際的な主題索引を作成しようと計画した。そして、1896年にはチューリッヒの本部で活動を開始した。

隔週刊で出される会報 (bulletin) の一部が、Dewey の分類表を独自に展開した分類番号をつけたカード形式のサービスになっていた。動物学を初め、解剖学、生理学、古生物学、生物学、顕微鏡使用法に関する雑誌記事が主で、単行本、パンフレットも若干含まれており、のちには年刊で、分野ごとに冊子体の索引がつけられていた。こうして、1908年までには約1,500万枚のカードが配布されたという。しかし、カード式であることで利用者にとってはファイリングが重荷となり、多くの人々の関心は抄録誌の方へ移っていった。1921年、Field が死亡すると次第に下火となり、1940年に途絶えた。

#### 2. “*International Catalogue of Scientific Literature*”

Royal Society は、1894年になると、20世紀の科学文献に対する主題目録作成の可能性を検討し始めた。これは、既存の *Catalogue of scientific papers* の欠陥を是正し、①雑誌記事ばかりでなく、図書やモノグラフをも含め、②著者名索引のほかに件名索引もつける、③件名のリストをつくること、④迅速に出すこと、を目指すものであった。

この計画は、発表されるとすぐに館界の反響を呼び、活発な論議が戦わされた。たとえば J. S. Billings は、コストの問題と、科学文献の完全な目録をすべての人に利用させることの有用性について疑問を投げかけ、既存の2次資料を自由に使ってきた研究者たちにとって、そのように大部なものが一箇所に集められることが果していいのか、また、リストされているものの多くは、コピーを入手することが難しいのではないかと述べている。

1896年にロンドンで開催された国際会議では、このような点のほか、サービス形態(カードか印刷目録か)、分類、統制組織など細かい点まで論議された。この時に

## 書誌調整の歴史

大体の管理構想が決まり、さらに1898年、1900年と2回の国際会議を経て、計画はほぼ完成した。

それによれば、この目録は、自然科学を17分野に分け、分類は Dewey の十進分類法をもう少し簡単にしたものを用い、年刊とする。組織は、決定機関として International Convention を置き、管理は International Council が受持つ。また、実行機関としては中央に Central Bureau を設け、各国内の Regional Bureau がそれを援助して文献の補充を行ない、さらに、各主題分野については International Committee of References からアドバイスを受ける、というものであった。

この目録では、たとえば *Concilium bibliographicum* のような既存のサービスを持つ分野においては特に注意を払い、重複を避ける努力がなされた。こうして、1902年には最初の年（1900年）の分が22巻になって出版された。

しかし、間もなく機構上の欠陥が露呈され、Regional Bureau から述られて来る文献リストの遅れを是正する組織が Central Bureau の方になかったため、その遅れは一層目立つことになった。そして 1914 年ごろまでには、財政上の困窮も手伝って刊行が 2～3 年ずつ遅れるようになっていた。

このほか、17分野という広範にわたる主題取扱いの不備、分類の窮屈さ、出版は中央で、編さん・財政などは共同作業という管理体制の矛盾、全般に科学分野のサービスとしては不適當など、*International catalogue*… 自体の持つ弱点が次第に明らかにされ、International Council は、1922 年に、これを廃止することを決議した。結局、*International catalogue*… は 1914 年の分までをカバーして終わることになったのである。

### 3. International Institute of Bibliography

書誌調整の歴史の上で最も大きな貢献をなしたと評価されているのは、International Institute of Bibliography（現在の FID の前身）である。

1890年、ベルギーの法律家であり、政治家でもあった Henri LaFontaine は、ブラッセルの社会・政治学会 (Society for Social and Political Studies) の中に書誌部門を作り、社会学文献のカード目録の作成を始め、翌年には法曹界にも書誌グループを作って法学雑誌に出た記事の summary を刊行することを始めた。一方、同じベルギーの法律家 Paul Otlet は、1892年、社会科学の書誌に関する論文を発表した。これが LaFontaine の目を引き、ここから 2 人の協力が始まったのである。

1893 年、ベルギー政府の援助を受けて International Office of Sociological Bibliography を設立、完全な世界的書誌調整を目指して活動を開始した。彼らは、①書誌的情報のクリアリングハウスの仕事を結びつける中央機関、②全世界の文献の完全な目録を備えた図書館、③緊密な連携による国際協力、がその解決策であると考え、そのためには現存の分類法では不十分として、Dewey の十進分類法の展開を試みていた。

書誌に関する最初の国際会議が開かれたのは1895年のことである。この時、International Institute of Bibliography (Institut International de Bibliographie. 以下、IIB と略す) が設立され、①Dewey の分類法を更に展開して、全世界の書誌にふさわしいものとする、②世界的な総目録—Répertoire Bibliographique Universel—の編さん、③International Office of Bibliography の設立、が承認された。ベルギー政府は、すぐにこの事務局を作り、世界的な目録編さんの任務を託すことになった。

当初、この協会は個人会員による協会制度をとっており、これら個々の会員が自国の書誌の改善をはかることによって、世界書誌の編さんが促進されると考えられていた。カレントな全国書誌の完備が目標達成のための第一歩であることが強調され、その確立のためにも、組織的な分類法と、出版物の納本に関する画一的な立法措置が重要であるとされたのである。

1897 年の第 2 回会議では、国立書誌協会 (national institutes of bibliography) の結成が約束され、さらに IIB も、国家機関の主要機能は全国書誌を作成することにある、と明示し、その目録は、総括的に過去の記録及び日々の出版物、一般個人および官庁・協会・団体などの発行する出版物を網羅すべきである、としている。さらに1900年のパリ会議において、全国書誌作成の基礎として、各国で法定納本制改訂の運動を昂揚させるよう要望した。

1908 年には第 4 回目の会議 (Fourth International Conference on Documentation) がブラッセルで開かれたが、この会議では全世界的な基盤に立つドキュメンテーションの組織が要請され、この計画を具現すべき恒久的な書誌を作ること、書誌・ドキュメンテーション国際会議 (International Congress of Bibliography and Documentation) の創設が決まった。そして、計画全体の基礎として各国政府の参加する International Union of Documentation が企画された。この構想の基本は、

各国が自国内で発行される出版物の全国書誌、若しくは完全な目録を作成し、または作成させ、この目録の写しを他国にも利用させる、というものであった。

このように、IIB は、世界的な書誌編さんに対する理念を明確に打ち出し、具体的な方策を示していったのだが（実際、1908年には700万枚のカードになっていた）、書誌情報のクリアリングハウスとしての機能を果たすためには、書誌そのものの作成、提供にとどまらず、書誌作成および情報全般を調整するための技術に関する情報をも提供すべきであることが強調されていた。Otllet も LaFontaine も、包括的でしかも展開可能な分類法を理想に描き、そのような一種の世界語によって、資料の分野においてだけでも世界の学者の意志疎通がはかれるようになることを望んだ。そして、まさに U.D.C.こそがそのための最良の道具であると信じていたのである。この U.D.C. は1899年に第一版（予備版）が、1907年にはフランス語による国際版が出された。

IIB の理念、目的、計画は広く各方面から支持され、現実に、書誌事業の発展、改善および調整のための仕事も具体的な成果を上げつつあり、この計画は順調に完成するかに見えた。

しかし、第1次世界大戦がこの事業の成行に、間接、直接に影響を及ぼした。総合目録のカード自体は無傷であったが、戦争によって International Institute of Bibliography と International Office of Bibliography の仕事はほとんど停止され、約1,300万枚のカードの維持は行き詰まってしまった。

このような事情を背景に、一方では出版物の激増、あるいは主題分野の細分化が進む中で、この事業そのものに対する反対が次第に顕著になってきた。反対意見の主なものは、①調整、用具の集中化に対する疑問、②IIB が、その計画のうち U.D.C. の伝播、完成という面に重点を置きすぎることに対する不信、③ますます強まっている書誌的な要求に対して、IIB は対応することが出来ない——ということであった。そして遂に、ベルギー政府からの財政援助も打ち切られてしまった。

1924年には、従来の個人会員制度を改め、国際的性格の科学・学術団体およびそれぞれの国の書誌調整に関する団体の連合体として再組織されたのであるが、このことは、国際協力を真に有効なものにするためには、個人の力の結集だけでは不十分であり、もっと組織だった機構の必要性が認められたことを示すものであろう。

しかしながら、改組されてもこの協会は目標を世界書

誌に置き、依然として集中化に固執していた。だが、実際に各国で書誌事業に携わる図書館関係者は、この国際的な調整における集中化ということについて、その最大の単位は国家であること、また、問題の最終的な解決は、各国が出来る限りまず自らの手で行なうべきこと、さらに、国際的云々を論う前に各自国内の図書館で底の方から着実に積み上げてゆき、それを基礎にした強固な国内機構が出来れば、国際協力も難しくはなくなるだろうという立場から、協会を全面的に支持することはなかった。

### C. 1920年代～1946年

第1次世界大戦が何らかの媒体となって、今まで述べてきた戦前の諸計画は、部分的あるいは全面的に崩壊したにもかかわらず、戦後、書誌調整の面では大きな躍進が見られた。これは、書誌調整における国際的連携の必要性が広く認識されたことと、国際連盟 (League of Nations) の創設に依るところが大きい。

#### 1. International Committee on Intellectual Cooperation

国際連盟の中の一委員会として、IIB の尽力により International Committee on Intellectual Cooperation がブラッセルに結成されたのは1922年のことである。この委員会は各分野の優れた専門家たちの集まりであり、その第1回会合における主要問題は、書誌に関するものであった。彼らは、書誌があらゆる知的活動の基礎をなすものと考え、①人知のあらゆる部門にわたる、できるだけ完全な目録を作ること、②あらゆる新知識が、できる限り速やかに伝播される手段、方法を採用すること、がその事業内容であるとしていた。

しかし、彼らは優秀な主題専門家であったため、自分の専門分野に関する文献の中から必要な情報を入手するという立場で書誌問題に取り組んだ。委員の中には、迅速な書誌というものは（科）学者によってのみ成され得る科学的な仕事であり、そのサービスは国際的な科学団体を唯一の頼りにすべきであると考える者もあった。そして、技術的な書誌顧問の必要を認め、学術専門家に、図書館員、書誌学者たちを加えた書誌小委員会 (Sub-Committee on Bibliography) を設けたが、その目的は、過去に蓄積された知識を保存し、将来速やかに伝播するための最良の実際手段を発見することにあった。

小委員会は1924年、①書誌的出版物（定期刊行物か否かを問わず、適及的、カレントいづれも、また基本的、選択的共に）に関する、②図書館の生産と販売の歴史に関する

る、③図書館、文書館その他の保存場所に関する、④知的活動および科学的協力団体の出版物に関する——網羅的かつ組織的なアルファベット順目録を作るため、IIBに援助が与えられるよう勧告した。

連盟とIIBとで協議した結果、世界の大図書館の集合目録 (collective catalog) という線で、特定の本の所在を示した著者名アルファベット目録を、一方、書誌および科学機関、知的協力団体については組織的な目録を作ることになった。

しかしこの計画も、IIB自身が政府からの支持を失って弱体化していたこと、International Committee on Intellectual Cooperationは、フランス政府からの提案を受けて、パリにInternational Institute of Intellectual Cooperationを設立する準備に忙しく、この計画の方に同委員会の注意が向けられていなかったこと、などによって思うような進展は見られなかった。

## 2. International Institute of Intellectual Cooperation

国際連盟のInternational Committee on Intellectual Cooperationとフランス政府の協力で、1925年、パリに設立されたInternational Institute of Intellectual Cooperation (IIIC)は、上記委員会の真の実行機関であり、のちのユネスコの事業への道を開いたとも言われている。その目的は、各種の機関を通じてさまざまな方法で知的協力を奨励し、調整をはかり、かつ促進することであった。それを実現する一つの方法として、書誌、図書館および情報サービスを調整、改善する計画が立てられ、たとえば、各国委員会や学術団体などの機関を通じて、各国に情報センターが設立されるよう支援を行った。すでに国立図書館などが存在する国では、それらの機関が所期のサービスを提供する手段をとるよう要請されていた。

国際的な科学連合体、学術研究団体などにこのIIICが与えた影響は大きく、多数の学術的な書誌、抄録サービス、レビュー誌などが生まれた。またIIIC自身は、国際連盟の援助を得て、カレントな書誌の分類別リスト *Index bibliographicus* を作った。この初版は1925年に出されているが、1931年の第2版には約1,900点の書誌が収録されていた。

IIICは第2次大戦終結（正確には1946年）まで活動を続け、ユネスコの先駆的存在ではあったが、この活動は、主に上層部の学者、研究者を対象とする専門的な性格のものであった。

## 3. International Federation for Documentation

IIB (International Institute of Bibliography) は、1920年代に入るとますますU.D.C.に力を注ぎ、これによって情報を世界的に組織しうるものと考え、その支持獲得に全力を傾けるようになった。その結果、オランダ、イギリスなどに熱心な賛同者を得て、オランダにはDutch Institute of Documentationが、イギリスにはBradford, Pollardらの努力によってBritish Society for International Bibliographyが設立された。これらの機関の熱心な活動を通じて、U.D.C.は次第に根を広げていった。

1930年代に入って、IIBはまずInternational Institute of Documentationと改名、次いで1938年、現在の名称のInternational Federation for Documentation (Fédération Internationale de Documentation)に変えた。この2度の組織替えを経た後は、各種書誌的サービス、および連盟の会員である団体の活動を調整する機能を発揮することに重点が移っていった。そして、①Donker Duyvis, Pollard, Bradford, Lancaster-Jones, Richardsonら熱心な個人を通して、②会員である、各国の団体——たとえばBritish Society for International Bibliography, Dutch Institute of Documentation, Swiss Association, French Committeeなど——を通して、また、③書誌調整に関する国際会議を通じて、国際的な書誌調整の問題に取り組んでいた。U.D.C.の利用促進は、その基本的活動の一つとして今日まで続いている。

## 4. International Federation of Library Associations

1927年、エジンバラにおける英国図書館協会創立50周年記念大会で、図書館協会の国際的組織としてInternational Library and Bibliographical Committeeが誕生することになった。この委員会の目的は、“国際会議のための時と場所を選び、各地方委員会と協同して会議を準備計画し、各図書館・図書館員、書誌専門家の団体、その他の機関など相互間の国際関係について調査ならびに勧告を行なうこと”であった。

1929年には、この委員会主催のもとに第1回の図書館および書誌に関する世界会議 (First World Congress of Libraries and Bibliography) がローマで開かれ、32か国から約1,400人が参加した。通過した諸決議は、いずれも書誌問題に関係の深いものであったが、特に決議第9号は全国書誌センター設立の必要性について次の

ように述べている。

現在においてもまた将来も、名国出版物の完全なコレクションをつくることの大いなる重要性を考慮してみれば、すべての国において少なくとも一つの図書館、大国においてはもっと多数の図書館が、その国の〔知的〕生産物はすべて、著作権納本制 (copyright deposit) に従って印刷者、発行者の提供するもの、あるいは出版者との特殊協定に従って入手するもの、あるいはまた特別割合資金の方法で取得されるものなど、いずれにしても、これを完全に収集する必要がある。<sup>20)</sup>

続く1930年、ストックホルムにおける会議で International Federation of Library Associations (IFLA) が生まれ、先の委員会 (International Library and Bibliographical Committee) はその執行機関となった。委員会設立の際、その名称の中に “Bibliography” が含まれていたのは、“図書館員の協会たるものが、書誌問題に関心を持つのは自明のことである” という代表の意見に従ったものと言われるが、委員会および IFLA の実際の活動を眺めてみると、それが書誌調整に果たした役割は間接的なものであった。すなわち、図書館員、ドキュメンタリスト、あるいは書誌専門家たちが一堂に会し、互いの情報を交換し合う国際会議の場を提供するという形で協力したのである。もちろん、上に掲げたような意義深い決議がなされ、書誌問題を検討する小委員会が設けられるなど計画は立てられたが、いずれも成就せずに終わった。そして、FID と連合委員会を結成し、標準化、専門図書館・情報センター、目録規則などの諸問題の方へと関心を向けていったのである。

#### D. 全国書誌の強調

これまで、19世紀後半から第2次世界大戦にかけて行なわれた、国際的規模での書誌調整の試みを幾つか取り上げ、その流れを概観してきた。この間、専門分野の文献全体を、あるいは全主題領域をカバーする世界的な書誌を作ろうという動きは、*Catalogue of scientific papers* を初めとして、同じ Royal Society の *International catalogue of scientific literature*、あるいは International Institute of Bibliography (IIB) の意図した世界総合目録 (Répertoire Bibliographique Universel)、動物学文献のサービス *Concilium bibliographicum* など、数多く起こった。いずれも、所期の目的のある程度は達

し、現在でも評価されるべき一面を持っているのであるが、大部分、管理機構の問題とか協力体制のあり方その他、自らの持つ矛盾のために立ち消えになったり、方向転換を余儀なくされた。

*Catalogue of ...* と、その補遺的性格を持つ *International catalogue ...* は、ともに出版物の急増に管理組織の不備が重なって遅れが目立ち、本来迅速であるべき科学文献の2次資料として十分な役割を果たしきれなかった。

また、世界の書誌的情報の交換センターたらんことを目指し、世界的な総合目録編さんを主要な任務として出発した IIB は、何度かの組織替えを経て FID となつてからは、調整を促進、援助する補助的ツールとしての U.D.C. の普及、開発および各種機関の書誌活動を調整することに専念するようになっていった。

こうして、実際に大規模な書誌編さんの試みの中から改めて認識され、強調されてきたのが、(その協力体制はともかくとして究極的には) 単一の書誌センターに情報を集中し、そこで大規模な世界書誌を作るのではなく、それを支える基本的単位としての各国の書誌活動の充実と全国書誌の役割であった。しかもこの考えは急に出現したのではなく、部分的にはあるが、長い間理解されてきたものである。

全国書誌の発生は、世界書誌と同様、やはり古い。すでに15~16世紀から、ドイツ、フランス、イギリスなどで大規模な販売書誌が相次いで作られていたが、これらの中には全国書誌と呼ぶような性格のものも多かった。

Gabriel Naudé がその著書 *Advice on establishing a library* の中で述べていること——図書館員は、可能な限り多数の蔵書目録を集めて、研究者が必要とする図書を探し出す手助けとなるような中央目録とすべきである——、あるいはパリ議会の顧問であった Abbé Drouyn が編さんを引き受けた膨大な書誌は、概念としては universal であったが、いずれの場合も、対象はほとんど自国(フランス)の資料に限られていた。これは、逆説的な見方をすれば、世界書誌の前提として全国書誌の重要性、意義が認識されていたことを示している、と云えないこともないであろう。

18世紀、フランス革命の期間中、僧院、修道院の図書館を国立にする計画の中で、全国的な文献リスト作成の提案が数多くなされたが、もしこれが完全に結実していれば、世界的な規模の書誌になったろうと言われていた。<sup>21)</sup>

## 書誌調整の歴史

世界的書誌調整のために、一国内の図書館目録を充実させるべきである、という問題が図書館人の中で論じられるようになったのは19世紀半ばのことであった。ひとつは、既に述べたアメリカ合衆国の Jewett による、“合衆国内公共図書館総合ステロ版作成”の提案に、もうひとつは、British Museum の目録計画に対する Richard Garnett の意見の中に伺うことができる。

British Museum の印刷図書、保管次長であった Richard Garnett は、19世紀間における全世界目録(Universal catalogue)の完成の可能性について疑念を抱きながらも、この最終目的に対するカレントな全国書誌の関連性を十分に認識していたばかりでなく、この関連性を強調することが、British Museum Catalogue の印刷に対する支持を獲得する最良の方法だと考えた。彼は、“……British Museum Catalogue を支持することは、全世界目録という更に大きな目的を達成するための一大躍進となるのである。全世界目録は、現在、夢物語にすぎない。これを直ちに実現しうる事業のように論じて来た人々の計画は、現在のところ複雑で捕え難い。彼等には作業の基礎が欠けている……この目録はその基礎となるものである。”<sup>22)</sup>と論じて一般の支持獲得に努めたのだった。

Jewett、Garnett、ともに、彼等の対象とした国家単位のツールというのは、カレントな全国書誌ではなく、図書館目録であったが、国単位の書誌活動の充実が、ひいては世界的なレベルの書誌調整につながるものと明確に認識し、言明していたという点は注目に値しよう。

その後、19世紀末期にかけては主題書誌の隆盛時代であったが、主題専門家たちの間でも完全な全国書誌の役割が注目されるようになってきた。

1890年代、未曾有の大規模な試みがブラッセルの IIB で始められようとしていたころ、イギリスの Frank Cambell は *The theory of national and international bibliography* の中で、カレントな全国書誌の基準、目的、手段というものを明示し、まず全国書誌を優先させるべきことを強調したが、実際的な成果は上げ得ずに終わっている。

IIB (International Institute of Bibliography) も全世界目録作成のために全国書誌を強調、それを積極的に利用しようとしていた。しかしこの場合は、あくまでも最終的には集中化ということ为前提として全国書誌を考えていたのである。

これに対して、国際連盟と IIC (International Institute of Intellectual Cooperation) の関心は、集中化ではなく、むしろ各国の基本的な書誌活動の方を重んじることであった。IIC は、各国がそれぞれ自国の主要著作品の定期的なリストを作成することを積極的に奨励し、また法定納本制の国内組織の改善事業を拡大していった。この仕事は、カレントな全国書誌の達成を促進することを認識して始められたものであった。

さらに、1929年の図書館・書誌に関する世界会議(First World Congress of Libraries and Bibliography)では“自国出版物の完全なコレクションを作ることの重要性”が強調されたし(注20)を参照)、1937年、パリで開かれた国際ドキュメンテーション会議(World Congress of Universal Documentation)では、“あらゆる国はすべて、全国書誌とその問題に関する報告を作成すべきである”という決議を採択した。この時提出された多くの議案は、全国書誌とドキュメンテーションとを関連させたものであった。

この他にも1930年代には、全国書誌に関する理論、必要性の強調、具体化計画、あるいはそれを推進する機構・組織といったものが数多く存在したが、実際上はほとんど進歩なく、本格的な進展は第2次世界大戦の終結以後に持ち越されることになった。

### III. 戦後の書誌調整活動

#### A. ユネスコの活動

##### 1. 設立

1946年に国際連合の専門機関として発足したユネスコは、計画の当初から相互理解の増進と、経済的・社会的開発の促進における図書館・ドキュメンテーションの重要性を認識していた。その第一の義務は、“出版物その他の情報資料の交換を含む、あらゆる形の知的活動における国家間の協力を促進し、いかなる国の人々にも、いかなる国で作られた印刷・刊行資料でも利用できるような知的協力の方法を提案することによって、知識を維持し、増進させ、普及させること”にある、と憲章は規定している。

戦中あるいは戦後にかけて、生産される文献量はますます増加した。と同時に、プレプリントの研究調査報告書の出現などに見られるように、文献そのものの特性にも変化が起り、戦前から持ち越された数々の課題に加えて文献世界の混乱は一層すさまじいものとなった。機

械処理はそれ対処する一手段として有用と考えられたが、さらに強く求められたのは、個々に存在する諸団体・諸サービス、あるいは各国々の活動の調整をはかり、協力を推進する方法と具体的な計画とであった。この機能を果たし得る機関として、ユネスコにかけられる期待は大きかったのである。

極く初期のユネスコの、書誌問題に関する計画案は、活動の中心組織を創設し、それによって、①すべての書誌事業を統合すること、②専門分野の国際的書誌、主題調査、索引・抄録に関する準備を促進すること、③各国の書誌の情報源 (bibliographical sources) に関する情報を提供すること、④書誌、総合目録、索引、抄録などの刊行を奨励し、もし必要ならば自らこれを企画し、全世界への配布を保証する、という壮大なものであった。

しかし、時を経るに従い、その果たすべき役割はユネスコの機能と予算の範囲内にとどまるべきものであって、①主導調査 (initial inquiry)、②全国的団体、あるいは国際的諸団体の活動の奨励、とりわけ関係諸グループ間の協力を力を注ぐべきであるとされるようになった。具体的な方針としては、書誌的方法の標準化；全国書誌、“優良図書”・特殊文書などに関する書誌；科学関係出版物の合理化；自然科学一般および社会科学におけるように、生物学・医学における抄録、索引事業；総合目録などが含まれていた。

この方針に沿って、1947年には医学・生物学抄録に関して Coordinating Committee on Indexing and Abstracting in the Medical and Biological Sciences が設立され、1949年6月の科学抄録に関する国際会議 (International Conference on Science Abstracting) をも含めて数次の会議が、ユネスコ主催のもとに開かれた。

しかしながら、抄録の問題は、世界的書誌調整問題の一つに過ぎず、複雑かつ重要な他の諸問題が、全く見逃されているわけではないにしても、あるいは軽視されているのではないか、という考えが次第に明らかになり、既に成されてきた種々の試みを全般的に回顧し、将来、書誌業務の国際的協力、あるいは改善を進めて行くに当たって、ユネスコとしては何をなすべきかについて再検討を迫られることになった。

## 2. 国際書誌サービス改良会議

1947年、メキシコ・シティにおける第2回ユネスコ総会では、書誌活動を調整する基礎として、米国議会図書館と共に書誌サービスの調査を行ない、その際に、他の

国立図書館の協力を求める旨、指示され、次回の大会 (1948年・ペイルート) でもこの決議は更新された。そして、この調査には、FID, IFLA, ICA (International Council on Archives) などの協力が要請された。この共同調査では、予備的なケース・スタディとして基礎教育のための書誌サービスについての研究が行なわれた程度であった。

1949年に入って、翌1950年開催予定の国際書誌会議の草案作成のために、ユネスコは再び米国議会図書館と共同で綿密な調査にとりかかった。この結果、同年中に2回の中間報告書が出され、次いで1950年、会議の草案として *Bibliographical services; their present state and possibilities of improvement* が最終報告書の形でまとめられた。この報告書では、書誌の現況と、統合による書誌サービスの改善について触れたあと、その統合の標準となるべきカレントな包括書誌 (current comprehensive bibliography); カレントな選択書誌 (current selective bibliography); 全国書誌活動；国際書誌活動それぞれの現状およびその役割について言及している。この中で、“国際書誌活動の将来の基盤” は次のようなものである、としている。

如何なる国も書誌的独立を望むことのできないのは明らかである。特定の国々を書誌的に自立せしめる見込……がありそうにも思われたいろいろな意義ある試みも、実際には不可能なことが明瞭になって来た。それゆえ、書誌サービスが国際団体により充足されなければ——その見込はありそうにもないのだが——これらのサービスは全国活動の上に基礎を置くより外に致し方はないし、そして世界の書誌的健康 (bibliographic health) というものは、その部分部分の健康を反映しつつづけていかねばならない。しかし部分は単に部分でしかなく、全体を予想しているものだから、部分を統合して全体とする——統合の唯一の目的は、書誌の効用と経済性を改善することにあると言えようが——努力がなされねばならない。……<sup>23)</sup>

この報告書のほかに、K. O. Murra の *Notes on the development of the concept of current complete national bibliography* が参考資料として、また41か国のワーキング・グループから、自国の書誌サービスの現状と改善のための勧告を記したレポートが提出され、併

## 書誌調整の歴史

せて討議資料に加えられた。

これら各種報告書、参考資料を一貫して流れている構想は、“十分な国際的書誌調整を期するには、まず第一段階として一国を基準とした書誌事業の改善と調整が必要である”ということ、そのために、知的業務に携わる者は常に自国あるいは専門分野の書誌問題の現状を把握していること、また、この現状を十分に認識した上で、自分の業務が問題解決により一層の貢献を成しうるような形で、日常の仕事を遂行していくことが望まれている。さらに、複雑な書誌問題の解決は、多くの細かな技術的・知的計画を、国家的ならびに国際的水準に基づくと同時に、地方的水準に基づいて完成することによって成されるものである、とも付け加えている。

こうした種々の準備を経て、1950年11月、パリで国際書誌サービス改良会議 (International Conference on the Improvement of Bibliographical Services) が開催されたのである。会議は、①全国的書誌問題 (Bibliographic organization at the national level)、②国際的書誌問題 (International bibliographic organization) の2セクションに分かれて討議が行なわれ、この結果、以後、この分野におけるユネスコの活動の基礎となる勧告が出された。<sup>24)</sup> それは14項目から成る次のようなものである。

- 1) 各国に、永続的かつ継続的基盤に基づく全国的計画団体 (National planning body) を設立し、それによって書誌・情報サービスの促進、調整をはかり、書誌問題に関する研究を奨励し、適切な国際機関と連絡を保ってゆくこと。
- 2) 書誌の出版物としては、差し当り、最小限総括的全国書誌 (General national bibliography) を整えること。その他、定期刊行物、新聞、地図、視聴覚資料などの索引、リストを刊行することが望ましい。
- 3) 書誌編さんに当っての技術的な問題——記入法は著者名、書名、主題、いずれからも探し出せるようにすること、その他。
- 4) 全国書誌の出版に対する準備——各国はその国情に従って、上記の書誌的出版物の出版を確実にするような最良の方法を決定すべきである。たとえば、国立図書館または類似機関による出版など。
- 5) 国立図書館が存在しない所では、政府がその設立を考慮すべし。その機能の一つは、すべての国内出版物について、少くとも一部 (一冊) は収集保存することである。

- 6) 全国書誌の編さんに支障を来さぬよう、法定納本制度を確立すること。
- 7) 総合目録などを整備して図書館相互協力を発達させること。
- 8) 自国内および他国間との書誌的情報に関する照会のセンターとして、全国書誌情報センターを設けること。(多くの場合、国立図書館あるいは図書館相互貸借を受持つ全国的機関の中に、または、これとの密接な関連のもとに)
- 9) 専門的書誌・情報サービスにも力を注ぐこと。この場合、刊行資料にとどまらず、i) 未発表情報源、および ii) 進捗中若くは計画中の学位論文を含む研究計画にも及ぶべきである。
- 10) 有能な書誌製作者 (bibliographer)、ドキュメンタリスト、図書館員を育成すること。

以上は、主に各国に対する勧告であるが、さらに、国際的な範囲での書誌調整活動に関するものとして、下のような項目が掲げられている。

- 11) 1951年に予定されている専門家委員会 (Committee on Experts) は、書誌問題に関する永続的国際諮問委員会となるべきである。
- 12) 上記委員会は、①書誌事業の国際的調整をはかる、②各国書誌活動を刺激する、③ユネスコ、国連およびその専門機関の書誌的出版物について協議する——などの任務を持つ。
- 13) 委員会の構成 (省略)
- 14) 早急になすべき課題は次の通り。
  - ①書誌サービスの組織および活動に関する便覧の編さん刊行。
  - ②試験的な全国 (または地域) 書誌センターの設立。
  - ③現存の、国際的テーマ書誌についての調査。
  - ④書誌情報の全国センターに関する国際的なガイドの編さん刊行。

このほか、国際的水準において成されるべき書誌問題に関する長期事業のリストが付された。その中には、①全国的計画団体相互間の情報交換センターの役割を果たすこと、②全国書誌の作成・改良を奨励、③書誌的技術 (記述・表示法、目録・分類、索引・抄録など) の標準化を目的とする諸活動の調整などが含まれていた。

こうして、憲章採択から5年目にして、ユネスコの書誌活動の原型が決まったわけである。

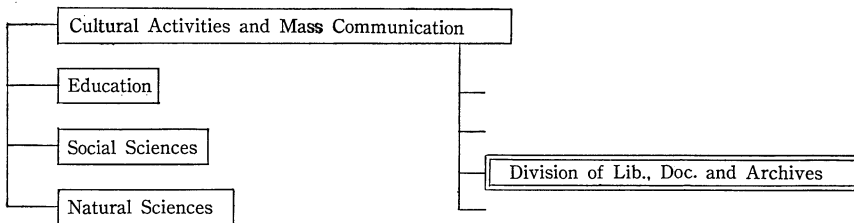


以下、ここでは、その活動の内容を、まず担当する組織という点からとらえ、書誌調整の問題がどのような位置づけを与えられてきたかを見る。次に、①出版活動、②全国文献情報活動グループ、③各国書誌センターの設立、④セミナー、シンポジウムの開催、⑤非政府機関との協力、と分けて、それぞれの面でユネスコが果たしてきた役割を振り返ってみる。

3. 組織の変遷

a) 担当部局

<事務局機構図> (1966 年以前)



and Archives) は、

- ①Division for the Promotion of Research and International Co-operation in Documentation
- ②Division for the Development of Documentation, Library and Archives Services
- ③Unesco Library and Documentation Service

の3部局から成り、書誌・ドキュメンテーション関係事項の標準化および図書館・ドキュメンテーション事業への機械化、自動化の適用促進を主な任務とする。また、ドキュメンテーションに関する局間委員会 (Inter-Departmental Committee on Documentation. 1968-) の事務局の機能を果たしている。さらに、IFLA, FID, ICA を初めとして ICSU/AB, ISO, IFIP (International Federation for Information Processing) などの国際的非政府機関と緊密な協力関係にある。

b) 書誌問題に関する常設委員会

- (1) 国際書誌諮問委員会 (International Advisory Committee on Bibliography. 1952-1960. IACB と略す)

1950年、書誌サービス改良会議で勧告された国際書誌諮問委員会は、1951年から暫定的な形で発足し、2回の予備会議を経て、1952年、パリのユネスコ総会の決議により、ユネスコの常設委員会となった。その主な任務は、①ユネスコの書誌・ドキュメンテーション活動に対

して助言を与え、②各国および世界の書誌発達に関する報告を毎年行なうこと、さらに、③ユネスコの書誌事業全般の連絡機能を果たすこと、であった。

書誌・ドキュメンテーションを含め、図書館全般、出版物の国際交換などの問題は、設立以来、コミュニケーション局の一部局である図書館・ドキュメンテーション・文書館部 (Division of Libraries, Documentation and Archives) が担当していたが (下図参照)、1966年に、ドキュメンテーション・図書館・文書館局 (Department of Documentation, Libraries and Archives) が新しく誕生した。

新しい局 (Department of Documentation, Libraries

and Archives) は、

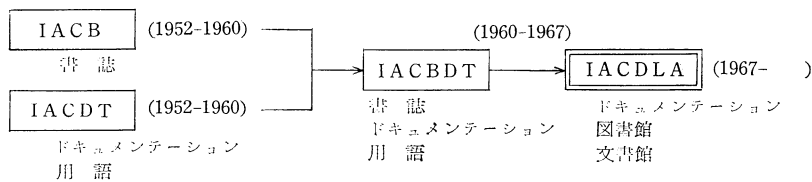
- (2) 国際書誌・ドキュメンテーション・学術用語諮問委員会 (International Advisory Committee on Bibliography, Documentation and Terminology. 1961-1967. IACBDT と略す\*)

IACB は、1960年12月末日を以て発展的に解消し、"純粹・応用科学におけるドキュメンテーションと用語に関する国際諮問委員会 (International Advisory Committee for Documentation and Terminology in the Pure and Applied Sciences. 1952- IACDT)" と合併して、IACBDT が新設されるに至った。新委員会は、元の2委員会の性格を合わせたものと考えてよく、ユネスコの関心を持つ全分野——自然科学、社会科学および文化活動——にわたって書誌、ドキュメンテーション、用語の問題を検討し、勧告することになった。

- (3) ドキュメンテーション・図書館・文書館に関する国際諮問委員会 (International Advisory Committee on Documentation, Libraries and Archives. 1967-) Departments of Documentation, Libraries and Archives の新設に呼応し、上記 IACBD に代わるものとして、1967年に設置された委員会である。文献、情報源の生産者およびその利用者、双方を代表する専門家に

## 書誌調整の歴史

### <委員会の変遷>



よって構成され、ドキュメンテーション、書誌、図書館の分野における最優先活動を勧告する仕事を行なう。具体的な任務は、①国、地域および国際的な図書館・ドキュメンテーション活動計画の改善、②技術設計の訓練をも含む、人材の養成訓練、③職業的訓練計画のための最低基準の確立、④ドキュメンテーション・図書館・文書館分野の研究センター (research center) の設立、⑤新しいドキュメンテーション手法、特にデータ処理の技術の評価、利用について勧告することである。

なお、これらの委員会は国際的レベルに立って勧告を行なうものであるが、事務局内での活動の調整と標準化を保つ機関として、ドキュメンテーションに関する局間委員会 (Inter-Departmental Committee on Documentation) がある。これは、1952年に発足した、書誌と用語に関する局間委員会 (Inter-Departmental Committee on Bibliography and Terminology) に代わって1968年設置されたものである。

委員会の変遷を見ると、当初は、書誌、用語、あるいはドキュメンテーションというように、問題別に細分されていた諮問委員会が次第に統合され、一層大局的な見地から問題を解決しようとする方向に向かっていることが伺える。これは、書誌調整問題も広い立場で眺められることを示しているとも言えようが、最近の傾向としては、むしろドキュメンテーション——特に機械によるデータ処理技術の研究など——の方に力点が移されつつあるような感も受ける。

#### 4. 書誌調整活動

ユネスコは、自身でも、一般文献情報、自然科学・技術、社会科学、人文科学、芸術など各分野にわたって多種の書誌活動を行なっているが、それとはまた別個の課題として、書誌調整問題に取り組んでいるわけである。したがって、ここでは、書誌作成の活動よりも、有効な書誌調整推進を援助するための側面的な活動を中心に見てゆく。ユネスコが書誌調整において果たしている役割は、本来、そういう性格のものだからである。

#### a) 出版活動

(1) ユネスコおよび加盟国の書誌、情報活動に関する公報 (機関誌)

##### (a) *Unesco Bulletin for Libraries*

1947年に月刊で始められたが、現在は隔月刊で、英・仏・露・スペイン4か国語版が出されている。世界のドキュメンテーション、図書館学分野における動向を知らせることと、ユネスコと共同で行なわれた研究調査計画のうち重要なものの経過あるいは結果を公表することが目的である。その他、細かいニュース、図書館学関係新刊書案内、書評なども掲載される。

##### (b) *Bibliography, Documentation, Terminology*

初め、*Bibliographical newsletter* として、1952年から1959年まで季刊の限定版で出されていたが、次第に頒布を拡張、1959年に *Bibliographical news* と改題した。さらに、国際書誌・ドキュメンテーション・学術用語諮問委員会 (IACBDT) の発足に伴い、やはりユネスコから出ていた自然科学ドキュメンテーション関係の雑誌 *Monthly bulletin on scientific information and terminology* を併合して *Bibliography, documentation, terminology* となったものである。現在は隔月刊で、英・仏・露・スペイン語版がある。

ユネスコと加盟各国の最近の文献情報活動の動きをまとめて各国の図書館・情報センターに提供する。内容は、①ユネスコからのニュース (News from UNESCO)、②世界各国の書誌サービス (Bibliographical services throughout the world)——各国からの報告、③国際的、全国的活動 (International and national activities)——一般的情報、教育、自然科学、人文・社会科学、古文学などに分かれる——から成り、②、③は大部分注解付き書誌の形になっている。

なお、これは5年ごとに累積される *Bibliographical services throughout the world* のカレント版である。

(2) 出版物、ドキュメント

ユネスコはさまざまな分野で国際的な書誌活動に参画

あるいは協力、助成を行なっている。ここに掲げるのは、書誌サービス改良会議の勧告にほぼ沿って、各国の書誌専門家の協力のもとに出版されているものである。

(a) *Bibliographical Services Throughout the World*

これはもともと、国際書誌諸問委員会の勧告の一つ、“各国および世界の書誌発達に関する報告を行なう”に基づいて、年報の形で始められたものである。加盟各国と国際機関の文献情報活動の状況（たとえば、全国書誌センターの有無、全国書誌の説明など）のほか、書誌的技術、標準化の問題などが含まれている。

第1回、第2回（1951、1952年）の年報は、L. N. Malclès によって、<sup>25)</sup> 続く3回は R. L. Collison の手で纏められ、さらに1950-59年をカバーした版が、同じ Collison によって完成している。<sup>26)</sup> 1960-64年版は、Avicenne Paul 編で、1966年に出版された。<sup>27)</sup> *Bibliography. documentation, terminology* に掲載されている各国の情報が補遺となる。現在、1965-69年版を準備中である。

(b) “Unesco Bibliographical Handbooks”

i. *National bibliographical services; their creation and operation.*<sup>28)</sup>

本書は、書誌サービス改良会議が、世界各国における全国書誌センターの創設と、国内刊行物総目録 (national bibliography) の作成を促進するようにと勧告した結果、その手引書として誕生したものである。全国的書誌サービスを持たない国々向けの便覧で、作成の技術などにも細かく言及している。特に、カレントな全国書誌に重点を置いているが、全国書誌センター、適及的全国書誌、総合目録などにも触れている。付録として、合衆国その他の全国書誌の実例が挙げられている。

ii. *Vocabularium bibliothecarii.*<sup>29)</sup>

図書館学用語集。約2,500の専門用語を、英・仏・独3か国語で U.D.C. の番号に従って配列している。改訂を経て、1964年には *Vocabularium documentationis* が出たが、これには、ロシア語、スペイン語が加わり、約3,200項目が収録されている。

iii. *Guide des centres nationaux d'information bibliographique.*<sup>30)</sup>

全国書誌情報センターのためのガイドブック。この中で、一国内に、①一般情報、②科学・技術、③人文科学、④社会科学・教育、の最大4つの情報センターが設置される、としている。英語、スペイン語訳もある。

iv. その他

1950年の勧告に従って、総合目録については *Union catalogues; their problems and organizations*<sup>31)</sup> が、また、国際社会科学ドキュメンテーション委員会編で、*Study of current bibliographies of national official publications*<sup>32)</sup> が出版された。

このほか、*Directory of reference works published in Asia*,<sup>33)</sup> *Directory of current Latin American periodicals*,<sup>34)</sup> *Directory of archives, libraries and schools of librarianship in Africa*<sup>35)</sup> などのディレクトリーが、“handbooks” シリーズに含まれている。

(3) ユネスコが援助を与えている書誌活動

ユネスコは、単に国連事務局内の書誌活動の調整にとどまらず、数々の国際機関に対して財政援助を行ない、専門的書誌・ドキュメンテーションサービスの改善を促進している。

(a) 一般文献情報活動

・国際文書館会議 (International Council on Archives, ICA. 1948-)

1951年より、年刊の *Archivum* を刊行。ユネスコの委託により、ヨーロッパの文書館におけるラテンアメリカ史料の手引 (*Guide to sources of Latin American history*), あるいは同種の *Guide to sources of African history* などの編さんを行なっている。

・国際ドキュメンテーション連盟 (International Federation for Documentation, FID. 1938-)

1961年にはユネスコと共同で *Bibliography of standards on documentation* を出版した。FID 自身では、*Index bibliographicus* (第4版続刊中), *Abstracting services in science, technology, medicine, agriculture, social science, humanities* などを出版している。機関誌は *FID news bulletin*.

・国際図書館協会連盟 (International Federation of Library Associations, IFLA. 1929-)

機関誌は *Libri*.

その他、国際標準化機構 (ISO), 国際音楽図書館協会 (International Assn. of Music Libs, IAML) などにも補助金を出し、事業の実施と専門出版物編さんのために契約を結んでいる。

(b) 科学・技術分野

・国際学術連合会議 (International Council of Scientific Unions, ICSU)

・国際医学団体協議会 (Council for International Organizations of Medical Sciences, CIOMS)

## 書誌調整の歴史

・国際工学団体連合 (Union of International Engineering Organizations, UIEO)

などがある。なお ICSU については後で詳しく触れる。

### (c) 社会科学分野

・国際社会科学協議会 (International Social Science Council, ISSC)

・国際社会科学ドキュメンテーション委員会 (International Committee for Social Sciences Documentation, ICSSD)

1950年、自主機関としてユネスコによって設立された委員会であるが、ユネスコとの関係は、国際書誌諮問委員会 (IACB) などのそれと類似している。同委員会の定期的な書誌のうち、*International bibliography of sociology* (1951-)、*...economics* (1952-)、*...political science* (1953-)、*...social and cultural anthropology* (1955-) 以上 4 種の国際的書誌は、ユネスコから出版されている。

### (d) 人文科学・哲学分野

・国際哲学人文科学協議会 (International Council for Philosophy and Humanistic Study, ICPHS)

ユネスコの財政援助によって、かなり多数の書誌的出版物が出ているが (哲学、言語学、文学、歴史、人類学など諸分野)、いずれも遅れが大きい。また、ユネスコとの実質的な関係は ICSSD などよりも薄く、その影響力も少ない。

b) 全国文献活動グループ (National bibliographical groups)

ユネスコの効果的な事業の一つとして、世界を通じて全国文献活動グループを設立することが挙げられている。これらのグループは書誌専門家、主題専門家、および国内通信員とで構成され、自国に特別関係の深い文献の問題について責任を負っている。多くの場合、各国ユネスコ国内委員会の小委員会として、稀に、独立の団体として組織されている。これらのグループは、国際委員会の示唆、指示に従って作業計画を立て、国内調査を行ない、国際的質問調査書に対して回答を行なうほか、各国のグループと相互に情報を交換したり、ユネスコの国際的書誌活動の連絡機関として努めている。

しかし、このグループは全加盟国に及んでいる訳ではなく、書誌問題を云々する前にまず図書館活動そのものを定着させねばならない段階の新興諸国も多い。また、組織が作られている国でも、その活動の程度は多種多様であろう。<sup>36)</sup>

c) 各国書誌センターの設立

全世界の書誌活動を統括する中央組織を設立しようという、ユネスコ準備委員会当時の構想は、その後、国立の書誌・ドキュメンテーションセンターのモデル建設という方針に変わった。この計画は、元来、ユネスコがその任務とする文化・教育面での、ひいては社会的・経済的発展のための図書館開発のプロジェクトとも相通ずるもので、それが書誌調整への一つの足がかりともなると考えられている。1954年にはブラジルに試験的な書誌センターが設立された。

このほか、特にアジア・アフリカ・太平洋地域の開発途上国に対して、科学関係書誌サービス、ドキュメンテーション・センターを含めた書誌センター設立に関する技術援助、専門家の派遣、資料・設備のための財政援助という形でバック・アップしている。

d) セミナー、シンポジウムの開催

(1) ヨーロッパ国立図書館シンポジウム (Symposium on National Libraries in Europe)

1958年9月、オーストリアのウィーンで開催された。これは、1950年の国際会議と同様、各国間の書誌活動の連携・調整をはかり、資料の国際的利用を円滑にすることを目的として、ヨーロッパ25か国の代表が集まって開かれたものである。したがって、その決議勧告の中でも、書誌・ドキュメンテーション活動における国立図書館の義務に関する事項が多かった。主なものは、書誌的基準の確立；国立の書誌活動の調整；全国書誌作成に対する責任；国際的書誌活動への協力、などである。

このシンポジウムの結果まとめられたのが *National libraries, their problems and prospects*<sup>37)</sup> であるが、この中でも、国際的な書誌事業には有効な全国書誌という確固たる基盤が必要であることを強調している。<sup>38)</sup>

(2) 中央アメリカ・カリブ諸国書誌セミナー

この地域の書誌問題に関する第1回目のセミナーは、1955年、キューバのハバナで開かれた。その主な目的は、この地域における書誌の現状を調査し、改善計画を立てることに加えて、モデルセンター設置のため、キューバの事情を調査することであった。この結果、ブラジル、メキシコなどと同類の全国書誌センターがキューバに建設された。

また、この時、中米諸国の連合書誌として *Bibliografía de Centro América y del Caribe* の編さんが決められた。(1958年から年刊で出ている)

1958年には第2回目がパナマで、続いて1960年、メキ

シンコ・シティで第3回目のセミナーが開催された。第3回会議では、法定納本制の奨励、各国書誌グループの強化、総合目録の編さん、専門家の養成、それに、*Bibliografía de Centro América*…を拡大した性格の *Bibliografía de América Latina* の準備、などが勧告されている。

#### (3) アラブ諸国書誌セミナー

1962年には、上記と同種のセミナーがカイロで開かれた。このセミナーでは、国の経済、社会の発展に寄与するための、効果的な書誌、ドキュメンテーションサービス、という点が強調され、書誌、ドキュメンテーション、出版物交換および技術的訓練のためのセンターを設立することを決議した。

#### (4) アジア・太平洋地域国立図書館の発展に関するセミナー (Regional Seminar on the Development of National Libraries in Asia and the Pacific Area)

ヨーロッパ国立図書館シンポジウムの影響を受けて、1964年8月、マニラで開催されたもの。この会議では、この地域の国立図書館発展を援助するため、専門家を派遣すること、アジア諸国語の翻字の問題、目録規則、出版物の国際交換、著作権法の問題などが討議された。

これまで挙げたような、地域的シンポジウムやセミナーでは、世界的規模での理解と実践が書誌問題の一般的な課題となる前に、なされるべき数多くの仕事があるという事実が証明されたものと言えるが、一方では、これらの活動がとりもなおさず国際的基盤での理解、実践を助長するのに有効である、ということなのである。

#### e) 非政府機関との協力

現在、国際的な書誌調整活動のプログラムは、主にユネスコによって推進されているが、専門的な非政府機関も大きな役割を果たしている。書誌・ドキュメンテーション関係分野で、ユネスコが密接な連携を保っている国際機関は IFLA, FID, ICA であるが、中でも前二者とは連合会議を開催したり、共同事業を行なったりする。その他 ISO, IFIP などとも協力関係にある。これらの機関とユネスコとの共通の問題は、本稿で扱っている意味での“書誌”調整というより、むしろドキュメンテーションに関係ある事柄の方が多いが、書誌調整の方法、技術という点を考えるならば決して無関係ではない。

ユネスコと比較的緊密な関係にある国際的な非政府諸機関の概要は次の通りである。

(1) FID (International Federation for Documentation; 国際ドキュメンテーション連盟. 1895- (現在の名称は 1938-) ハーグ)

U.D.C. の育成に努力しているが、情報処理技術の開発、その標準化、ドキュメンテーションの国際的な組織網を確立することを目的としている。U.D.C. の管理に当る中央分類委員会 (FID/CCC) を初めとして、分類法研究 (FID/CR), 開発途上国 (FID/DC), 機械システムの運用 (FID/OM), 情報の基礎理論 (FID/RI), ドキュメンタリストの訓練 (FID/TD), 産業界の技術情報活動 (FID/II), 学術用語および言語学 (FID/TL), 機械システム理論 (FID/TM) など、専門的調査事項を研究する委員会がある。

FID はまた、世界的な科学情報システム (UNISIST) に関する、ICSU/UNESCO の feasibility study に対しても有力な助言、勧告を行なってきた。ユネスコのほか、ICSU, ICSU/AB, IFLA, ISO, IFIP, CIB (International Council for Building, Studies and Documentation) とも密接であるが、特に IFLA との間には、開発途上国への援助、機械化、学術用語、分類などの分野で協力関係を増強しつつある。

(2) IFLA (International Federation of Library Associations; 国際図書館協会連盟. 1929- ロンドン)

国際的および各国内の諸図書館協会を構成員とし、図書館事業の向上と国際的図書館協力、統一の助成促進をはかると同時に、図書館活動に関する実際的な諸問題を研究する。具体的には、目録規則の国際的調整、総合目録貸借センターの促進などが主な任務となっている。ユネスコと密接な関係を持ち、FID の国際会員ともなっており、しばしば同一地で同一時期に総会を開催して協力の実を上げている。また、標準化の問題については ISO と緊密に協力しつつ事業を行なっている。

(3) ICSU (International Council of Scientific Unions; 国際学術連合会議. 1931- ローマ)

国際学術連合 (union) と各国の学術代表機関 (national member) より成り、union 間の調整、連絡、協同と、各国間の国際協調を目的とする。1966年にはユネスコと共同で、科学情報流通の国際的なネットワーク (UNISIST) について、その実現可能性の調査を開始、1970年、最終報告書をまとめた。

ドキュメンテーションに直接関係あるものとしては、1952年に設立された ICSU 抄録委員会 (ICSU/AB—Abstracting Board) がある。これは ICSU 本体からは

## 書誌調整の歴史

ほとんど独立的に運営され、財源はユネスコなどに仰いでいる。世界の科学文献の抄録誌の改善、調整を基本的機能としており、機械化のための抄録の標準化を目指して数多くの研究が行なわれている。なお、FIDとの間で、1次情報源、2次の情報サービスに関して緊密な協調関係を保っている。

(4) ISO (International Organization for Standardization; 国際標準化機構。1946-ジュネーブ)

各国の標準化団体を構成員とし、一般に標準化に関する情報の国際交流および国際標準の設定を目的とするばかりでなく、ドキュメンテーションとその関連事項についても標準を設定しつつある。

図書館・ドキュメンテーション関係の統一については、ユネスコ、ICSU、FID、IFIP、IFLAなどとも緊密な協力関係にある。120の専門委員会(Technical Committee)があり、数多くの勧告と勧告草案を出してきた。TC/37は学術用語、TC/46がドキュメンテーション(ドキュメント再生産および文字の転換の小委員会を持つ)、TC/97がコンピューターと情報処理に関する委員会である。これまでに提出された勧告には、雑誌名省略法(R4, 1954)、定期刊行物の体裁と刊行方式(R8, 1955)、雑誌などの短縮目次リスト(R18, 1955)、雑誌引用法、基本要素(R77, 1958)、抄録・摘録(1959)などがある。

(5) IFIP (International Federation for Information Processing; 国際情報処理連盟。1960-チューリッヒ)

1959年、ユネスコ主催でパリで開かれた国際情報処理会議を契機として創立された。科学技術における情報処理の役割の国際的理解を増進させることを目的とする。

実際の事業は専門委員会(Technical Committee, TC)に分かれて行なわれている。TC1はISOと連携して、コンピューター用語とデータ処理の基準を確立すること、TC2は国際的なプログラム用語の改良、開発などを研究している。

IFAC (International Federation for Atomic Control) や FID と連携を保っているが、1967年にはFIDと共催で情報機械処理の国際会議(Conference on Mechanized Information Storage, Retrieval and Dissemination)がローマにおいて開催された。

上記諸機関とユネスコとの協力関係をまとめると——科学技術分野においては、FID/ICSU/IFLA/ISO/Unesco 連合委員会を結成、コードの問題に関して“Basis of a

code of good practice for scientific publications”を発表(*Unesco bulletin for libraries*, vol. 17, Jan/Feb. 1963, p. 27-31 所収)するほか、1次資料と抄録、翻訳、用語、自動化などの諸問題を取り上げてきた。科学・技術分野における種々の活動が、ユネスコの全体の活動、すなわち、知識の伝播の方法、技術、あるいは書誌調整に関するもの——に与える影響は大きい。

書誌的技術の標準化は、書誌調整の一つの側面であり、書誌サービス改良会議でも長期事業の一つに指定されたが、これに関してユネスコと緊密な接触を保っているのはISO、特にTC/46 (Documentation)である。

一方、目録規則の方では、1961年、ユネスコの援助のもとにIFLA International Conference on Cataloguing Principlesが組織された。ここでなされた決議は、各国それぞれの事情にもとづいて作られた各国の規則の詳細な部分までを変えようとするものではなく、原則とか方針をなるべく一致した方向に向けようという狙いを持ったものであった。

### B. 最近の動き(機械化を中心として)

これまで、ユネスコを中心とした、各国単位の書誌活動の奨励、あるいは国際的非政府機関との協力のもとに行なわれている書誌調整の動きを見てきた。これらの活動は、調整を円滑に進めるために必要な書誌的記述の標準化など、技術的な問題の解決に当たるといった、側面から援助する性格の強いものである。

ここで、自ら大きな書誌的データを保有し、サービスに携わっている機関の動きに目を向けてみよう。近年、機械化はどの分野にも見られる趨勢であるが、保守的要素を多分に備えた図書館を含む、情報の世界でも例外ではない。電子計算機の発達に伴い、その、情報収集、処理技術への応用も各分野で試みられている。国際的レベルでの書誌調整を考えた場合、学問の性格と文献の特性、それに加えて利用する側の要求のあり方から、敏速な情報処理・提供と国際的な交流が特に要請される科学技術分野においては、幾つかの国際的規模の情報システムが開発、実用化されて、書誌的記述の膨大なデータ・ファイルが存在している。これら、機械化されたシステムの代表的なものには、米国化学会のCAS (Chemical Abstracts Service)、国際原子力機構のINIS (International Nuclear Information System)、物理、電気工学、制御分野のINSPEC (Information Service in Physics, Electrotechnology and Control)、米国医学図書館のMEDLARS (Medical Literature Analysis

and Retrieval System), Excerpta Medica などがある。いずれも、研究者を対象とする専門的性格のものであるが、米国議会図書館 (Library of Congress—LC) による MARC II (Machine Readable Cataloging) プロジェクトは、特定主題に限らず全分野の図書を対象としている点が特徴であり、各方面からの反響も大きく、注目を集めている。

MARC は、LC が、目録データを機械が読み取れる形に変換してその記録を他に配布し、究極的には、全国的な図書館網を作って機械の読み取れる目録データを図書館から図書館へ電送することが可能かどうかを確かめる目的をもって、正式には 1966 年から始めた企画である。その年の11月には、磁気テープによる目録記録が米国内に散在する 16 の実験図書館に郵送され始めた。翌 1967年まで続いたこのパイロット・プロジェクトで、参加館は MARC を次のようなことに利用した。

- ① 新刊書に気づいて収集するための選書ツール；目録データを、手元にある図書と照合する際の MARC テープの使用。
- ② MARC 記録を LC の件名標目と LC 分類番号によって調査選択し、大学教官への書誌情報の選択的普及 (selective dissemination of information) を図る。
- ③ 図書目録の作成。たとえば総合目録や学位論文の目録を、参加館が MARC フォーマットを採用して地域用に情報の記録作成を行なう。
- ④ MARC 記録の、通常の技術的処理サイクル (すでに機械化された技術的処理部分) への統合。
- ⑤ 専門書誌作成のための MARC 記録の検索。
- ⑥ データ要素 (即ち、著者、書名、版次、出版者、刊年) のどの組合せが、また、どの順序で行なえば、与えられた事項を正確に確認できるかを決定する実験。
- ⑦ シラバス、学科コースのアウトライン、学科コースの書誌、及びリーディング・リストを MARC 記録から作成すること。
- ⑧ 編成規則と細分類の研究。

.....

パイロット・プロジェクト後、それを実験した16の図書館を初め、MARC に関心を持つ機関や図書館員の意見、米国医学図書館 (NLM), Committee on Scientific and Technical Information (COSATI), British National Bibliography (BNB) などの協力によって、改訂を加えた format が、1968年になって発表された。

この format (磁気テープなどに入れる記録の構造・内容・およびコード体系) は、パイロット・プロジェクトの時のそれとは大分異っているので MARC II と呼ばれている。そして、MARC II の format はその後も更に改訂を加えられている。

MARC に対する、かつて無いほどの関心の高まりは、単に LC から米国内の利用館への配布サービスにとどまらず、もっと広範な概念の書誌サービスへと、LC の考えを変えさせる契機をもたらした。こうして、標準化が基本的条件として考慮されるに至り、MARC II の format は一般的で融通性に富んだものとなった。これは、あらゆる形態の資料の書誌的記述の伝達に有力な手段となり得るものである。MARC II は、米国内のみならず、海外でも採用する基準として各方面で検討され、また受け入れられつつある。国内では LC を初めとして、NLM, National Agricultural Library が、この format を採用しており、American Library Association の Information Science and Automation Division によっても、この format は米国の図書館の一つの基準として是認されている。

一方、英国では、全国書誌である British National Bibliography (BNB) が、国内出版物のカレントな情報に関する完全な書誌的記録を機械で読み取れる (磁気テープの) 形に作成するコンピューター・システムの開発を決めた。そして、その format として MARC II の形式を採用することになり、UK MARC パイロット・プロジェクトが、BNB の指揮と、Office for Scientific and Technical Information (OSTI) による基金で実施された。OSTI による基金は、引続き BNB に与えられ、機械可読書誌データ・サービスの実験が続けられている。

BNB では、すでに、BNB 用カードのステンシル作成のために、紙テープに打ち出された MARC の記録を使っている。また、BNB に収録されている図書の MARC テープから、英国内の図書館ばかりでなく、外国の図書館へも磁気テープのコピーが配布される。このように、LC と BNB との間で常時磁気テープの交換がなされるということは、利用者が、英、米両国の目録記録に、より迅速に接近できることを意味する。

BNB の例は一つの示唆を与えている。すなわち、もし国際的なコミュニケーションの format の基準というものが開発されれば、古書や逐次刊行物、さらには研究報告なども含む膨大な書誌的データ・バンクを作ること

が出来るようになるし、究極的には、各国が、一つの flexible な (たとえば MARC のような) システムのもとに自国の記録を蓄積することも可能になるはずである。(もっとも、これには言語 (文字) の障害などもあるが。)

先に挙げた科学技術分野の国際的情報システムにも見られるように、現在急増する文献量と多様化する要求に十分応えうるように膨大なシステムを保持していくためには、中心となる機関のみの力では限度があり、入力作業の分担を各国に依頼するのが全体的な傾向となっている。各システムでは、OECD や IAEA (International Atomic Energy Agency) などの国際機関を通じて、各国に、さまざまな検索サービスや磁気テープの提供を条件として、情報源となる文献の入力作業の協力を要請してきている。ここでもやはり、各国単位の活動を基盤とした緊密な国際協力が考えられているのである。

さらに、機械化された情報システムにおける書誌調整上の問題点は、システム相互間の両立性 (compatibility)、あるいは互換性 (convertibility) という点である。既存するシステム間には、機械で処理する書誌的データの format の互換性を考えた標準化についての対策はなされていない。書誌的情報の迅速な処理を目指して開発されたものが互換性に欠け、迅速な情報伝達の効果を上げ得ないものであったら、その価値は半減してしまう。こうした見地から、情報の電子計算機による処理システムにおける書誌記述の互換性のために必要な標準化、という問題を、国際レベルで検討する気運が高まってきた。OECD 科学情報政策委員会の小委員会 “情報伝達のための標準化” 作業パネル、あるいは ICSU/UNESCO 共同プロジェクト——世界科学情報システム (UNISIST) の実現可能性検討委員会——の小委員会 “書誌データの伝達性の標準化” に関する作業部会などが相次いで設置され、ISO などとも協調して各種コード、規格の作成、検討に当たってきた。

一方、LC の MARC II は、科学技術のみならず、あらゆる分野にわたる書誌の機械処理の format として、発足当初から図書館界における standard を目指して開発されてきたものであり、あらゆる書誌データを一つの format によって記録しうる融通性の広いシステムである。そして、その融通性を更に大きくするために、単純な format にする努力が続けられている。

## 結 語

これまで、国際的なレベルで行なわれた書誌調整の試みを概観し、戦後はユネスコの活動を中心として見てきた。それまで (第2次大戦頃まで) の数々の経験の中から得たものは、世界的な書誌調整は決して夢想ではないが、それは、まず世界各国が、自国内の書誌調整を十分に行ない得た上で初めて成就される、ということであった。そして、その最も基本的な手段として全国書誌の作成、そのための法的基盤、施設 (書誌センター) の充実などが要請されたのである。

こうした理論と方法は現在でも広く認められており、ユネスコも、この方針に沿って活動を進めてきた。すなわち、書誌調整に必要と思われる数多くの基本的な事柄に注目、各国の書誌、ドキュメンテーション活動の充実が、ひいては国際レベルでの書誌調整につながるものである、として、国レベル、あるいは地域レベルの活動を援助、推進してきた。そして一方では、国際的調整を一層促進させるための実践手段としての、書誌的技術の標準化、分類・目録などの分野では、他の専門機関との間に連携を保ち、研究を進めてきた。このような体制、活動のあり方は、ユネスコの立場や性格から考えて当然のことであり、決して誤っているとは言えないだろう。

しかし、ユネスコが書誌調整において果たしている、または果たし得る役割は全体の中の一部分に過ぎない。推進母体であるユネスコがどう足掻いても、その構成員たる各国々の実質が伴わなければ成果は上がらないし、また、単純な個々の寄せ集めが、果して有機的な全体を構成しうるかという疑問も起こってくる。その間には、さまざまな副次的な要素が介在し、単なる部分の集合に終らせないようにするための種々の工夫が必要となってくるだろう。

全国書誌が直ちに世界的書誌調整に結びつくというのは安易な考えであろう。しかし、繰返し述べてきたように、この大きな目標を達成しうる最大単位は国家であるという理念は、根本的には誤っていないと考える。そのためにも、国の書誌活動に責任を持つ国立図書館などの機関が、自国の現状を常に的確に把握し、積極的に書誌調整に関してリーダー・シップを取っていく気構えを見せるべきであろう。そして、根底さえ確固たるものであれば、専門書誌、あるいは選択書誌も容易に作成しうるという信念のもとに、徹底的な収集と記録、さらに処理、提供のスピード化も考慮さねばならないと考える。



一口に書誌調整と言っても、それに対する要求の強さ、徹底度は、学問分野の性格と、それに伴う研究方法、文献の性格の違いによってかなり異なる。自然科学・技術分野では国際的レベルでの協力体制が比較的とりやすいし、現に、かなり有効なサービスが行なわれている。一方、社会科学、人文科学などでは、一国内でも諸派に分かれ、纏まりのとれないことも稀ではない。こうした事情を無視して一律に書誌調整の問題を論ずることは無理であろう。しかし、最近の傾向として、従米の固定的な学問体系の枠を越えた新しい学問や研究法が誕生しており、将来も、ますます増加するだろうということは十分に予測される。

また、全世界的な傾向として、書誌調整の問題は次第に細分化されつつあるように見受けられる。ユネスコの組織替えの中にも表われているように、有効な書誌調整を行なうための側面的な——技術の——問題、たとえば、標準化、機械化、自動化などが次第に大きな比重を持って取り扱われるようになってきている。これは、情報源の種類、形態の多様化とも密接な関連を持っている。ますます多様化する情報源の中で、文献の占める位置は、早急には変わらないとしても、次第に考え直さざるを得なくなるだろう。

こうした状況の中で、書誌調整の問題は如何に扱われていくべきか。その必要性和重要性は疑いもないことなのであるから、常に究極の目的に立ち返って、user-oriented な解決法が追究されていくべきであろう。

- 1) 長沢雅男. 参考調査法. 東京, 理想社, 1969. p. 201.
- 2) Wilson, Patrick. *Two kinds of power; an essay on bibliographical control*. Berkeley, Univ. of Calif. Press, 1968. p. 1-2.
- 3) Unesco/Library of Congress. Bibliographical Survey. 文献書目計画班 第2回中間報告書. [Second interim report of the Unesco/Library of Congress Bibliographical Planning Group. Appendix to the Library of Congress Information bulletin, Sept. 13-19, 1949.] 国立国会図書館受入整理部訳. 国立国会図書館 [1951?] p. 29. なお, R. Staveley も, *Notes on modern bibliography* (London, Lib. Assn., 1954) の中で, ほぼ同じ表現で書誌調整の究極の目的を述べている. (p. 9)
- 4) *Ibid.*, p. 12.
- 5) *Loc. cit.*
- 6) Unesco/Library of Congress. Bibliographical Survey. 書誌サービス; その現況と改善の可能性 国際書誌会議の草案として準備された報告. [Bibliographical services; their present state and possibilities of improvement.] 国立国会図書館受入整理部訳. 国立国会図書館 [1951?] p. 11. (原文 p. 1)
- 7) *Loc. cit.*
- 8) Clapp, Verner W. The role of bibliographic organization in contemporary civilization. <Shera, J. H. and Egan, M. E., eds. *Bibliographic organization; papers presented before...* Chicago, Univ. of Chicago Press, 1951> p. 4.
- 9) *Loc. cit.*
- 10) Downs, Robert B. "Problems of bibliographical control," *Library trends*, vol. 2, April 1954, p. 498.
- 11) *Ibid.*, p. 501.
- 12) "bibliographical (あるいは bibliographic) control" ということが、主としてアメリカで用いられていることにも依るのか、英国で出版されている辞典、用語集の類 (たとえば、Landau の *Encyclopaedia of librarianship* (1~3 版), Harrod. *Librarian's glossary* など) にはない. Unesco の *Vocabularium bibliothecarii* (1953, 1958, 1962) にも、ドキュメンテーションと同義で、"情報の選択、分類及び伝播 (selection, classification and dissemination of information)" のことである、と簡単に記されているのみである。
- 13) 藤川正信. ドキュメンテーションの定義. <文部省大学学術局編. ドキュメンテーションハンドブック. 東京電機大学出版局, 1967> p. 7.
- 14) Stokes, Roy. *Bibliographical control and service*. London, Andre Deutsch, 1965. p. 17.
- 15) Clapp, *op. cit.*, p. 5.
- 16) *Loc. cit.*
- 17) Wilson, *op. cit.*, p. 3.
- 18) *Loc. cit.*
- 19) Malclès, L. N. *Bibliography*. [La bibliographie.] Tr. by T. C. Hines. New York, Scarecrow, 1961. p. 94-7.
- 20) Koch, Theodore Wesley. "The First World Library Congress, Rome-Venice, June 15-30, 1929," *Library journal*, vol. 54, Sept. 1929, p. 705. (Unesco/LC. *Bibliographical services...* Appendix: *Notes on the development of the concept of current complete national bibliography*, p. 21 から再引用).
- 21) Linder, L. H. *The rise of current complete national bibliography*. New York, Scarecrow, 1959. p. 28.
- 22) Unesco/LC. *Bibliographical services...*, Appendix, p. 2 から要約したもの.
- 23) Unesco/Library of Congress. Bibliographical

## 書 誌 調 整 の 歴 史

- Survey. 書誌サービス……, *op. cit.*, p. 122.
- 24) Unesco. 国際書誌サービス改良会議 パリ 1950. 一般報告. パリ. ユネスコハウス. 1950年11月7-10日. [*General report of the Conference on the Improvement of Bibliographical Services.*] 国立国会図書館訳, 国立国会図書館, 1951. p. 38.
- 25) Malclès, L. N. *Bibliographical services throughout the world*. First and second annual reports. 1951-52/1952-53. Paris, Unesco, 1954. 319 p. (Unesco bibliographical handbooks, 4)
- 26) Collison, R. L. *Bibliographical services throughout the world*, 1950-59. Paris, Unesco, 1961. 228 p. (Unesco bibliographical handbooks, 9)
- 27) Avicenne, Paul. *Les services bibliographiques dans le monde 1960-1964*. Paris, 1966. 233 p. (Manuels bibliographiques de l'Unesco, 11)
- 28) Unesco. *National bibliographical services, their creation and operation*; prepared in accordance with the recommendation of the International Advisory Committee on Bibliography, by Knud Larsen. Paris, 1953. 142 p. (Unesco bibliographical handbooks, 1)  
邦訳: 全国書誌サービス——その作製と機能——。(国立国会図書館, 1957. 197 p.)
- 29) Unesco. *Vocabularium bibliothecarii; English, French, German*, by Henri Lemeitre. Rev. and enl. by Anthony Thompson. Paris, 1953. 296 p. (Unesco bibliographical handbooks, 2)
- 30) Unesco. *Guide des centres nationaux d'information bibliographique*; établi conformément aux recommandations du Comité consultatif international de bibliographie. Paris, 1953. 68 p. (Manuels bibliographiques de l'Unesco, 3)
- 31) Unesco. *Union catalogues*; their problems and organization, by L. Brummel. Paris, 1956. 94 p. (Unesco bibliographical handbooks, 6)
- 32) Unesco. *Study of current bibliographies of national official publications*; short summary and inventory, edited [by] Jean Meyriat, [and] compiled [by] International Committee for Social Sciences Documentation. Paris, 1958. 260 p. (Unesco bibliographical handbooks, 7)
- 33) Unesco. *Directory of reference works published in Asia*, by P. K. Garde. Paris, 1956. 139 p. (Unesco bibliographical handbooks, 5)
- 34) Unesco. *Directory of current Latin American periodicals*, by the Pan American Union. Paris, 1958. 320 p. (Unesco bibliographical handbooks, 8)
- 35) Unesco. *Directory of archives, libraries and schools of librarianship in Africa*, by E. W. Dadzi and J. T. Strickland. Paris, 1965. 112 p. (Unesco bibliographical handbooks, 10)
- 36) 多少古い数字であるが, 1962年現在, 国内グループは44か国, 通信員は75人にとどまっている。(Unesco. *Some aspects of Unesco's role with respect to bibliographic control*, p. 10より) なお日本の場合, 1951年, 国立国会図書館内に書誌サービス改良委員会が設置され, 国内の書誌問題などを審議していたが, 1954年には, ユネスコ国内委員会によって結成された文献活動連絡協議会の中の一組織に組み込まれた。しかし現在は両者共, その名前では存在していない。日本の書誌活動の状況は国立国会図書館によってユネスコに報告される。
- 37) Unesco. *National libraries; their problems and prospects*. Symposium on National Libraries in Europe. Vienna, 8-27 Sept. 1958. Paris, 1960. 125 p.
- 38) *Ibid.*, p. 49.

## 参 考 文 献

(単行書)

- ・ Collison, R. L. *Bibliographical services throughout the world*, 1950-59. Paris, Unesco, 1961. 228 p.
- ・ Collison, R. L. 国際機関・団体の文献情報活動(1950-1959年). [*Bibliographical services throughout...*] 齊藤国夫訳. 日本ユネスコ国内委員会, 1963. 97 p.
- ・ Unesco. *Some aspects of UNESCO's role with respect to bibliographic control 1945-1965*. Paris, 1967. 48 p.
- ・ Unesco/Library of Congress. *Bibliographical Survey. 書誌サービス; その現況と改善の可能性 附録: 最新完全全国書誌の概念の発展に関する覚書*. [*Notes on the development of the concept of current complete national bibliography*, by Kathrine Oliver Murra.] 国立国会図書館受入整理部訳. [1951?] 81, 18 p.

(雑誌記事その他)

- ・ Penna, Carlos V. UNESCO. <Landau, Thomas, ed. *Encyclopaedia of librarianship*. 3d rev. ed. London, Bowes and Bowes, 1966> p. 455-63.
- ・ Coblans, Herbert. "Bibliographic organization at the international level," *Wilson library bulletin*, vol. 40, April 1966, p. 733-7.
- ・ Gjesdel, Tor. "Unesco のドクメンテーション活動," *ドクメンテーション研究*, vol. 17, 1967. 8, p. 109-10.
- ・ Murra, Kathrine Oliver. History of some attempts to organize bibliography internationally.

- <Shera, J. H. and Egan, M. E., eds. *Bibliographic organization*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1951> p. 24-53.
- Sviridov, F. A. "International trends in documentation and information services," *Library trends*, vol. 17, Jan. 1969, p. 326-38.
  - "Unesco Department of Documentation, Libraries and Archives: aims and prospects," *Unesco bulletin for libraries*, vol. 21, May-June 1967, p. 136-9.
  - "Unesco's programme for documentation, libraries and archives, 1967-68," *Unesco bulletin for libraries*, vol. 21, May-June 1967, p. 119-28.
  - "Unesco's programme for documentation, ... 1969-70," *Unesco bulletin for libraries*, vol. 23, May-June 1969, p. 114-25.
  - 牛島悦子. "書誌記述の標準化", *現代の図書館*, vol. 7, 1969. 6, p. 57-61, 84.